

# 学位論文

## 送り手の性役割期待を内包する言葉かけが 受け手に与える影響

広島大学大学院

教育学研究科 教育学習科学専攻

学習開発学分野

D164953 吉岡 真梨子

## 目 次

第1章 序論 .....	1
第1節 性役割期待を伝える言葉かけと性役割学習における自己呈示	
第2節 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけ	
第3節 暗黙の性役割期待とパフォーマンス	
第4節 性役割の発達	
第5節 先行研究における課題および本研究の目的	
第2章 実証的研究	
第1節 【研究Ⅰ】性役割期待を内包する言葉かけが青年期前期の中学生の自己呈示に及ぼす影響 .....	12
1. 目的	
2. 方法	
3. 結果	
4. 考察	
第2節 【研究Ⅱ】性役割期待を内包する言葉かけが青年期後期の大学生の自己呈示に及ぼす影響 .....	29
1. 目的	
2. 方法	
3. 結果	
4. 考察	
第3節 【研究Ⅲ】性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示に及ぼす影響における発達段階比較 .....	46
1. 目的	
2. 方法	
3. 結果	
4. 考察	
第4節 【研究Ⅳ】性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示とパフォーマンスに及ぼす影響 .....	61
1. 目的	
2. 方法	
3. 結果と考察	
第3章 総合考察 .....	76
第1節 結果のまとめ	
第2節 本研究の意義	
第3節 本研究の課題と今後の展望	
引用文献 .....	85

# 第 1 章 序論

## 第1節 性役割期待を伝える言葉かけと性役割学習における自己呈示

言葉かけに関する研究は、教師や保護者から児童・生徒へのほめ言葉や叱り言葉について取りあげているものが大多数であるが（例えば、青木，2009；竹内，1995），日常的に生起する多様な言葉かけの中には、送り手のもつ性役割期待が内包されている言葉かけも生起していると考えられる。家族や学校で、性役割の期待として「男（女）らしくしなさい、男（女）のくせに」と言われたことがあるかについて調べた多々納・若築（2003）は、学校で言われたことがあると回答した男子中学生は 8.9%，女子中学生は 26.5%いることを示している。子どもたちが一日の大半を過ごす学校での言葉かけは少なからず子どもたちに影響を及ぼしており、このような明示的な性役割期待のみならず、受け手が性役割だと認識しにくい暗黙の性役割期待を内包する言葉かけも、児童・生徒の性役割学習に影響していると考えられる。

柏木（1967）により、性役割学習の過程には、自分の性に期待されている役割がどのようなものかを認知すること、その役割を演ずることの 2 つの過程が含まれていることが示されており、上記のような性役割期待を受けた場合、受け手は自己呈示としてその役割を演じる可能性がある。これまでの性役割期待に関する先行研究では、伝統的性役割期待

を受けた場合は伝統的な自己呈示を行い、逆に非伝統的性役割期待を受けた場合は非伝統的な自己呈示を行うことが明らかにされている（松本，2002）。

一方で、伊藤・秋津（1983）によって、青年が性役割を習得する過程において、周囲からの役割期待を的確に認知することはひとつの重要な課題ではあるが、その期待に沿った行動をそのままとることが青年の成熟や適応を必ずしも意味するものではないことが示されている。これらを踏まえれば、性役割学習とは、周囲からの役割期待を的確に認知し、自らの性役割観と照らしながら、主体的な選択にもとづいた役割を呈示していく中で、性役割が学習されていく過程を指すといえる。したがって、性役割学習を行う段階にある青年期では、必ずしも性役割期待に沿った自己呈示が行われるわけではないと考えられる。

他者の性役割期待に沿う自己呈示が行われることを見いだした松本（2002）も、相手の期待が到底容認できないものであった場合には、より一層非伝統的性役割に立った自己呈示を行う可能性があることを指摘しており、受容の範囲を考慮すべきだと示唆している。すなわち、受容の範囲を超えた期待の場合、期待に沿った自己呈示が行われない可能性を示唆している。この受容の範囲については、個人のもつ性役割観などが該当するが、主体的な性役割学習を行ううえで重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、受け手

のもつ性役割観によって自己呈示に差がみられるかについては十分に検討されていない。

## 第2節 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけ

松本（2002）を含めた、性役割期待に関する多くの研究では、実験操作として刺激人物の性役割観や実験参加者の性別を強調した刺激の提示が使われている（例えば、Riemer, Chaudoir, & Earnshaw, 2014；森永・坂田・古川・福留, 2017）。そのため、実験参加者にとって提示された刺激が性役割期待であることや、その内容が伝統的か非伝統的かを認知しやすくなっていた。この場合、性役割としての期待が明示されているために、求められている性役割を意識しやすく、期待に沿った呈示の選択がなされやすいと考えられる。また、受容の範囲にあるかについても検討しやすいといえる。しかし、日常生活では実験手続きのような明示された性役割期待はほとんど存在せず、送り手の価値観が内包された言葉かけなどによって、暗黙のうちに伝えられる性役割期待が多いと考えられる。性役割期待が明示されない場合、受け手は性役割としての期待かどうかを意識しにくいいため、明示された場合に比べ、期待に沿った呈示を行う可能性が高い。そこで、本研究では、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけを、送り手の性役割観が内包されたものであり、受け手に

対してジェンダー・ステレオタイプを期待するものでありながら、性役割としての期待であることが明示されていない言葉かけであるとし、その影響を検討する。具体例としては、「男の子は行動力があるね」というような明示的な言葉かけに対して、「行動力があるね」というような性別を強調しない言葉かけを暗黙的とする。

### 第3節 暗黙の性役割期待とパフォーマンス

受け手に対し潜在的にステレオタイプを伝えるという点では、Glick & Fiske (1996) によって指摘された好意的性差別に類似性をみることができる。受容されやすい好意的な態度や言葉で伝えられる性役割期待は、潜在的にステレオタイプを押し付ける性差別となる危険性をはらんでいる (Glick & Fiske, 1996)。そのため、敵意的性差別に該当する言葉よりも受け手の受動性を高め、性役割行動を誘導しやすい。これまで実験的研究によって、敵意的性差別よりも好意的性差別を受けた方が女性のパフォーマンスが低くなること (Dardenne & Dumont, 2007) や、好意的性差別発言によって意欲が下がり、パフォーマンスが低下する可能性 (森永・坂田ら, 2017) などが明らかになっており、類似性をもつ暗黙の性役割期待においても、性役割行動の誘導やパフォーマンスへの影響がみられると

推測される。したがって、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが青年期の性役割学習に及ぼす影響を検討することは重要だといえる。

#### 第4節 性役割の発達

ここまで、性役割期待と性役割学習における自己呈示について述べてきたが、柏木(1967)によって、児童期から青年期にかけて受動的な性役割取得から主体的能動的な性役割学習へと変化が生じることが明らかにされている。また、柏木(1972)では、性役割認知の発達には被験者の性による差があり、男子では年齢による変動が顕著であることなどが明らかにされ、発達段階や性別による差が存在することが確認されている。

##### 青年期前期の中学生

先にふれた柏木(1967)の指摘より、青年期前期にある中学生は、性役割取得から性役割学習への移行期にあると考えられる。そのため、性役割期待を内包する言葉かけを受けた場合、主体的に役割を選択することがまだ十分にはできず、その期待を受け入れた呈示を行いやすいと考えられる。加えて、青年期前期は、第二性徴に代表される心身の変化を受容し、異性との親密な関係を形成し始める時期であり、同年代の異性からの性役割期

待が性役割学習において重要な影響を及ぼす時期である。また、思春期以降、友人が心理的居場所として機能するようになり（光元・岡本，2010），教師や保護者に代わって同年代の期待や評価が大きな影響力をもち始めることが推察される。したがって、特に同年代の異性からの暗黙の性役割期待を内包する言葉かけに注目し、性役割学習への移行期にある中学生がどのような呈示を行うのかを検討することが重要であろう。

### 青年期後期の大学生

青年期後期にある大学生は一般的に、固定された学級集団に所属する中学生や高校生と比べると、より広く多様な価値観をもつ人との交流をもつことが可能となり、ピア・プレッシャーが薄まっていくことが推測される。また、柏木（1967）の指摘を踏まえると、青年期後期にある大学生は移行期を経て、より主体的能動的な性役割学習段階に進んでいると考えられる。このことから、性役割期待を受けた場合、自らの性役割観と照らしあわせながら、性役割を選択することが可能となるといえる。

一方で、青年期の恋愛行動をジェンダーの観点から検討した土肥（1995）によると、親密な関係になった青年期後期の男女は、一対一場面において伝統的性別役割に沿った行動をとる傾向が強まることが指摘されている。また、赤澤（2006）も、青年期後期にある女

性の女性役割行動が、交際相手である男性の男性役割行動の遂行度を高めていたことなどを示している。本研究は青年期の恋愛行動に着目するものではないが、成人期前期へと移行する前段階であることも考慮すると、異性と一対一という場面における期待や評価は、受け手の性役割特性の呈示に大きな影響を及ぼすと予想される。したがって、性役割期待が内包された言葉かけを受けた場合、受け手は主体的な性役割学習段階にあっても受動的な性役割選択を行う可能性があるだろう。

### 性役割の発達における性差

他者の抱く役割期待が人の自己呈示行動に及ぼす影響について実験した松本（2002）の研究では、対象を女子大学生に限定していたが、性役割学習は性別に関わらず、青年に課せられた発達課題のひとつである。伝統的な男性役割に対する態度について尺度開発および男女比較を行った渡邊（2017）は、男性の方が伝統的な男性役割に縛られていると推察している。すなわち、男性が女性と同様、あるいは女性以上に性役割期待の影響を受けていることも考えられる。対象に男性を含む性役割期待と自己呈示の関係にふれた心理学研究としては、例えば Cialdini, Wosinska, Dabul, Whetstone-Dion, & Heszen（1998）などがあるが、彼らは社会において女性/男性に求められる性役割期待について受け手の

認識を顕在化させた場合の影響を検討している。そのため、他者から受け手自身に向けた性役割期待を内包する言葉かけを受けた場合の影響とは異なる可能性が高い。性役割認知の発達には被験者の性による差があり、男子では年齢による変動が顕著である（柏木，1967）ことも踏まえると、性役割期待の影響を検討するうえでは、男性にも着目し、性別による差を考慮することが重要である。

## 第5節 先行研究における課題および本研究の目的

ここまで述べてきた先行研究を踏まえ、以下のように整理することができる。まず、性役割期待に関する多くの研究では、実験操作として刺激人物の性役割観や実験参加者の性別を強調した刺激の提示が使われているが、日常生活では明示された性役割期待はほとんど存在しないと考えられる。二つ目に、主体的な性役割学習を行ううえで、受け手のもつ性役割観が重要な役割を果たしている可能性があるが、受け手のもつ性役割観によって自己呈示に差がみられるかについては十分に検討されていない。三つ目に、青年期における性役割期待の影響に着目する際、発達段階や性別による差を考慮することが重要であり、同年代の異性は送り手として大きな影響を及ぼしている可能性がある。

以上3点から、本研究では、青年期前期および後期の男女を対象として、同年代の異性からの暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが受け手の自己呈示およびパフォーマンスに及ぼす影響を検討する。あわせて、受け手の性役割観に着目し、伝統的性役割観の高さによって自己呈示に差がみられるかを検討する。

研究ⅠとⅡでは、性役割取得から性役割学習への移行期にあると考えられる青年期前期の中学生男女と、より主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の大学生男女を対象とすることで、各発達段階における性別、性役割観、性役割期待の種類における自己呈示への影響を明らかにした。さらに、研究Ⅲでは、研究ⅠとⅡで得られたデータを用いて、発達段階による差を検討した。最後に、研究Ⅳでは、好意的性差別と類似性のある暗黙の性役割期待には、性役割行動の誘導やパフォーマンスへの影響がみられると推測されることに対して、大学生を対象として実験的に、性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示およびパフォーマンスへ及ぼす影響を検討した。

以下に、研究ⅠからⅣの目的を示す。

研究Ⅰ 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、青年期前期の中学生男女の自己呈示がどのように影響を受けるか明らかにする。

研究Ⅱ 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、青年期後期の大学生男女の自己呈示がどのように影響を受け、変化するか明らかにする。

研究Ⅲ 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示に及ぼす影響について、発達段階による差がみられるかを明らかにする。

研究Ⅳ 暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、自己呈示やパフォーマンスがどのように影響を受け、変化するか実験的に検討する。

## 第 2 章 実証的研究

### 第 1 節 研究 I

性役割期待を内包する言葉かけが青年期前期の中学生の自己呈示に及ぼす影響

## 目 的

暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、受け手の自己呈示がどのように影響を受けるか、発達の観点から明らかにするため、まず研究 I では、性役割取得から性役割学習への移行期にあると考えられる青年期前期の中学生男女を対象とし、以下の 2 点を検討した。(1) 暗黙のうちに伝えられた性役割期待を内包する言葉かけであっても、受け手はその性役割期待に沿った性役割に関連する特性の呈示を行うのか、(2) 性別や伝統的性役割観の高さによって、言葉かけを受けた後の自己呈示に差がみられるのか。なお、性差を検討するために、便宜的に伝統的性役割と非伝統的性役割を対照的なものとして扱った。すなわち、調査協力者の性別と一致する性別の性役割期待を伝統的性役割期待、一致しない性別の性役割期待を非伝統的性役割期待とした。性役割についての自己呈示を多面的に検討するため、本研究では、性役割について男性役割特性 (Masculinity)、女性役割特性 (Femininity)、人間性 (Humanity) の 3 特性を用いた。

性役割特性の一つである人間性が性別に関わらず男女ともに社会から期待される特性であること (伊藤, 1978) や、これまでの研究を踏まえて、研究 I では以下のような結果を予想した。

(1) 伝統的性役割を期待された場合、男性は男性役割特性を高く呈示し、女性は女性役割特性を高く呈示する。(2) 非伝統的性役割を期待された場合、男性は女性役割特性を高く呈示し、女性は男性役割特性を高く呈示する。(3) 男女ともに期待される人間性は、性役割期待の種類や受け手の性別に関わらず高く呈示される。(4) 伝統的性役割を期待された場合、伝統的性役割観の高さに関わらず期待に沿った呈示を行うが、非伝統的性役割を期待された場合、伝統的性役割観が高い人は自らの性別に一致する伝統的性役割特性を呈示する。

## 方 法

### 調査協力者

H 大学附属中学校の 1 年生 76 名（男性 37 名，女性 39 名），2 年生 79 名（男性 44 名，女性 35 名）の計 155 名を対象として、場面想定法を用いた質問紙調査を行った。調査協力者は性別ごとに伝統的性役割条件と非伝統的性役割条件に無作為に割り当てられた。

### 場面設定

性役割条件の操作として、性別ごとに Figure 1 のような伝統的および非伝統的性役割条件の 2 種類の 4 コマストーリーが作成された。1 コマ目と 2 コマ目は共通の内容であり、



Figure 1 男性中学生を対象とした伝統的性役割条件の4コマストーリー

「他校の中学生と交流会を行うことになり、ペア活動をするため、相手と班員紹介プリントやメッセージカードを交換することになった」という導入部分である。性役割条件操作のため、(a) 3コマ目の第三者による刺激人物の紹介コメントと、(b) 4コマ目の刺激人物からペアとなる調査協力者（ストーリー中では“あなた”と表記）に向けられたコメントを以下のように設定した。なお、本研究で扱う暗黙の性役割期待を内包する言葉かけに該当する部分は、(b) 刺激人物からペアとなるあなた（調査協力者）に向けられたコメントであり、刺激人物と調査協力者は異性とし、3コマ目の (a) 第三者による刺激人物の紹介を示すことで、刺激人物のもつ性役割観を推測しやすくした。日常生活では、普段の交

流等により送り手の性役割観が把握されていると考えられるが、本研究においては場面想定法を用いるため、3 コマ目に第三者による刺激人物の紹介を挿入している。

(a) **第三者による刺激人物の紹介** 刺激人物の伝統的あるいは非伝統的性役割を反映するような趣味や刺激人物の評価、異性のペアに期待される性格を、第三者である班員がプリント内で紹介する場面とした。研究 I では、4 コマ目で調査協力者へ暗黙の性役割期待を伝える刺激人物への自己呈示を尋ねるため、調査協力者に対する直接的な期待を含まない 3 コマ目の刺激人物紹介は第三者が行い、自己呈示への影響を可能な限り除外するよう設定した。伝統的性役割の条件では、刺激人物 A さんの性別に一致した性役割（例えば A さんが女性の場合は女性役割）に沿った人物評が書かれており、ペアにはその性別に一致した性役割特性（例えば A さんが女性の場合は男性役割）をもつ異性がよいという紹介内容である。一方、非伝統的性役割の条件では、伝統的性役割条件とは異なる性別の性役割に沿った刺激人物 B さんの人物評とペアに期待される性役割特性が書かれている。内容は、BSRI 日本語版（東，1990，1991）や M-H-F scale（伊藤，1978）に用いられている性役割語を参考に作成した。男性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の場合、女性 A さんは「趣味；お菓子作り，班員からの分析コメント；サポートにまわるところがある

かも→しっかりした、ひっぱってってくれる男子がペアだとうまくいきそう!」、非伝統的性役割条件の場合、女性 B さんは「趣味；プラモデル作り、班員からの分析コメント；自分の意見を主張したりてきぱきしてるところがあるかも→温和なやさしい男子がペアだとうまくいきそう!」という紹介がなされている。女性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の男性 A さんは女性 B さんと同様、非伝統的性役割条件の男性 B さんは女性 A さんと同様の内容である。

**(b) 刺激人物から調査協力者に向けられたコメント** ペアとなる調査協力者に対して女性役割を期待し評価するものと、男性役割を期待し評価するものの 2 種類のコメントにより、調査協力者に向けられる性役割期待を操作した。性役割としての期待を暗黙のうちに伝えるため、男/女らしいなどの性別が明示されるコメントではなく、BSRI 日本語版(東, 1990, 1991) や M-H-F scale (伊藤, 1978) の伝統的な男性/女性役割特性に該当する性役割語を参考に以下のコメントを作成した。男性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の場合、“あなた”の第一印象を女性 A さんは「積極的で行動力がありそう、頼りになりそう、ひっぱってってくれそう」、非伝統的性役割条件の場合、女性 B さんは「明るくてやさしそう、気がききそう、相手の立場に立って考えてくれそう」とコメントしている。女性調

査協力者に対しては、伝統的性役割条件の男性 A さんは女性 B さんと同様、非伝統的性役割条件の男性 B さんは女性 A さんと同様の内容である。

### 質問紙の構成

**場面の提示** 「次のストーリーをよく読んで、“あなた”だったらどのように感じるか、右のページから始まる質問項目に回答してください」と教示文に示し、伝統的性役割条件または非伝統的性役割条件の場면을提示した。

**性役割に関する特性についての自己呈示の測定** 調査協力者の性役割に関する特性についての自己呈示を調査するために、M-H-F scale (伊藤, 1978) の 30 項目 (Masculinity 10 項目, Humanity 10 項目, Femininity 10 項目) を用いた<sup>1</sup>。教示文は「ストーリーを読んで、あなたは A/B さんに対して、自分自身をどのような人間に見てもらいたいと考えていますか? 次のような形容詞がそのイメージにどの程度当てはまると思うか、もっとも近い数字を○でかこんでください」である。7 件法 (0 ; 全く当てはまらない~6 ; 非常に当てはまる) で測定した。なお、本研究では M-H-F scale を用い、上記の教示文を示すことで、暗黙の性役割期待を伝えた 4 コマ目の相手に対してどの程度性役割に関する M, H, F 特

---

<sup>1</sup>項目例として、Masculinity には「たくましい」「行動力のある」、Humanity には「暖かい」「誠実な」、Femininity には「かわいい」「献身的な」などがある。

性を自己呈示するか測定した<sup>2</sup>。そのため、調査協力者個人の性役割意識とは必ずしも一致しない。

**伝統的性役割観の測定** 伝統的性役割観は、性差観スケール（伊藤，1997）30項目から、「セックスにおいて男性がリードするのは当然である」などの中学生に実施が難しいと判断される項目を除いた残り 15 項目を用いて<sup>3</sup>、4 件法（1；そう思わない～4；そう思う）で測定した。得点が低いほど、性役割に対して平等主義的な態度をもち、伝統的性役割観をもっていないと考えられる。

#### 倫理的配慮

調査するにあたり、結果は研究のみに用い、個人は特定されないこと、不快に感じた場合は途中で回答を止めて構わないことなどを質問紙に明記した。加えて回答後には、調査内容について記述したデブリーフィング用の資料を教室内に掲示した。

---

<sup>2</sup>本研究で扱う Masculinity, Humanity, Femininity は伝統的な性役割特性の呈示を測定するために用いており、現代の性役割特性を反映するものではないことに留意する。

<sup>3</sup>本研究では性差観スケール（伊藤，1997）における 1, 6, 8, 9, 12, 14, 16, 17, 19, 21, 22, 23, 25, 26, 27 を使用した。

## 結 果

### 信頼性の検討

本調査において用いた自己呈示の Masculinity 10 項目, Humanity 10 項目, Femininity 10 項目<sup>4</sup>, 伝統的性役割観の 15 項目<sup>5</sup>それぞれについて, 信頼性を確認するために内的一貫性を検討した。その結果, Masculinity 項目の  $\alpha$  係数は.89, Humanity 項目の  $\alpha$  係数は.86, Femininity 項目の  $\alpha$  係数は.85, 伝統的性役割観項目の  $\alpha$  係数は.83 の値を示し, 信頼性が確認された。したがって, 以降の分析において Masculinity 項目の平均得点は伝統的な男性役割特性を呈示する得点 (M 呈示得点), Femininity 項目の平均得点は伝統的な女性役割特性を呈示する得点 (F 呈示得点) とし, Humanity 項目の平均得点は性別に関わらず男女ともに社会から期待される特性を呈示する得点 (H 呈示得点) とした。

### 群ごとの平均値および標準偏差

欠損値の多さあるいは外れ値判定の多さから 4 名を除外し, 男性 77 名, 女性 74 名の

---

<sup>4</sup>性役割に関する特性の自己呈示を測定した尺度について M-H-F scale と類似した 3 因子構造を仮定し, 確証的因子分析を行ったところ, 適合度指標は RMSEA=.09, CFI=.82, AGFI=.67 であった。極端に適合度が低くなかったため, 類似した因子構造とみなし分析を行う。

<sup>5</sup>項目数を減らした伝統的性役割観尺度についても確証的因子分析を行ったところ, 適合度指標は RMSEA=.07, CFI=.88, AGFI=.83 であった。極端に適合度が低くなかったため, 概ね妥当な因子とみなし分析を行う。

計 151 名を対象として、以後の分析を行った。伝統的性役割観の高さによって群分けを行うにあたり、伝統的性役割観得点において性別による差がみられるかを確認した。性別を独立変数、伝統的性役割観得点を従属変数とし、t 検定を行ったところ、 $t(147.4) = 2.30$ 、 $p < .05$ 、 $d = .38$  で有意であり、男性のほうが女性よりも伝統的性役割観得点が高かった。そのため、性別ごとの平均値に基づいて、伝統的性役割観 High 群、Low 群に群分けした。分析にあたり、Table 1 に示したように、性別および性役割条件、伝統的性役割観 HL を組み合わせた 8 群における各得点の平均値および標準偏差を算出した。

Table 1 中学生における伝統的性役割観と性役割特性に関する自己呈示の各得点の平均と SD

			伝統的 性役割観	M 呈示	H 呈示	F 呈示
女性	伝統的性 役割条件	性役割観 H (n=13)	2.68 (0.31)	3.30 (0.77)	3.68 (0.95)	3.04 (0.95)
		性役割観 L (n=24)	1.74 (0.39)	3.07 (1.14)	3.48 (1.10)	2.62 (1.06)
	非伝統的 性役割 条件	性役割観 H (n=16)	2.59 (0.25)	3.62 (0.56)	3.94 (0.61)	2.94 (0.69)
		性役割観 L (n=21)	1.78 (0.41)	3.66 (0.94)	3.82 (0.74)	2.67 (1.02)
男性	伝統的性 役割条件	性役割観 H (n=19)	2.65 (0.26)	3.39 (1.13)	3.56 (0.82)	2.71 (0.99)
		性役割観 L (n=20)	1.83 (0.32)	2.92 (1.26)	3.18 (1.15)	2.29 (1.25)
	非伝統的 性役割 条件	性役割観 H (n=26)	2.63 (0.35)	3.03 (1.19)	3.51 (1.08)	2.46 (0.94)
		性役割観 L (n=12)	1.81 (0.41)	2.26 (1.41)	2.80 (1.51)	2.03 (1.16)

注) ( )内は SD を示している。

## 男性役割特性呈示の条件による差異

M 呈示得点について、性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 3 要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果が有意であり ( $F(1, 143) = 5.99, p < .05, \eta^2 = .04$ )、女性のほうが男性よりも M 呈示得点が高かった。また、性別と性役割条件における交互作用が有意であった ( $F(1, 143) = 7.29, p < .01, \eta^2 = .05$ )。下位検定を行ったところ、Figure 2 にみられるように、非伝統的性役割条件において女性のほうが男性より ( $F(1, 143) = 12.93, p < .001, \eta^2 = .08$ )、また女性において非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 143) = 4.08, p < .05, \eta^2 = .03$ ) M 呈示得点有意に高かった。

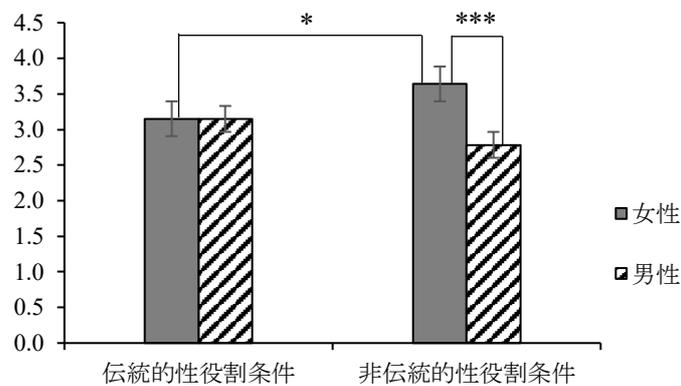


Figure 2 中学生男性役割特性呈示得点における性別と性役割条件の交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 (\*\*\*)  $p < .001$ , (\*)  $p < .05$ ) を示している。

### 女性役割特性呈示の条件による差異

F 呈示得点について、性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 3 要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果が有意であり ( $F(1, 143) = 4.77, p < .05, \eta^2 = .03$ )、女性のほうが男性よりも F 呈示得点が高かった。しかし、性役割条件、伝統的性役割観 HL の主効果、およびすべての交互作用は有意ではなかった。

### 人間性特性呈示の条件による差異

H 呈示得点について、性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 3 要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果が有意であり ( $F(1, 143) = 5.75, p < .05, \eta^2 = .04$ )、女性のほうが男性よりも H 呈示得点が高かった。しかし、性役割条件、伝統的性役割観 HL の主効果、およびすべての交互作用は有意ではなかった。

## 考 察

本研究では、暗黙の性役割期待が伝統的な男性役割特性、女性役割特性、人間性の 3 つの特性の自己呈示に及ぼす影響について、4 つの予想を立てた。伝統的性役割条件で、男性の男性役割特性、女性の女性役割特性における呈示得点が高ければ、予想 (1) が支持され、非伝統的性役割条件で、男性の女性役割特性、女性の男性役割特性における呈示得

点が高ければ、予想（2）が支持される。予想（3）は、人間性の呈示得点で性役割条件や受け手の性別における差がみられない場合に支持される。予想（4）は、伝統的性役割条件で伝統的性役割観の高さによる差がみられず、非伝統的性役割条件で伝統的性役割観の高い男性が男性役割特性を、女性が女性役割特性を高く呈示した場合に支持される。

### 性役割期待を内包する言葉かけの効果とその性差

本研究の結果では、伝統的な男性役割特性を期待された女性は、伝統的な女性役割特性を期待された女性・男性よりも、男性役割特性を相手に示していた。一方、男性は性役割条件間で女性役割特性の呈示に差はなかった。また、性役割条件にかかわらず、女性の女性役割特性および人間性呈示が男性よりも高いことが示された。

まず、女子中学生の男性役割特性の呈示結果から、予想（2）の非伝統的性役割を期待された場合、女性は男性役割特性の呈示が高まるという部分について支持する結果が示された。女性に社会から期待される女性役割特性には当てはまらない男性役割特性についても積極的に呈示を行っていたことを踏まえると、女子中学生は暗黙の性役割期待に沿った呈示を行う可能性が示唆されたといえる。しかし、女性役割特性の呈示では、性別と性役割条件に交互作用がみられなかったことから、予想（1）の伝統的性役割を期待された場

合、女性は女性役割特性を高く呈示するという部分については十分に支持されなかったといえる。M-H-F scale を用いて現代の大学生の性役割認知を検討した後藤・廣岡（2003）は、一般的に社会で重要とされる特性の評価において、男女ともに Humanity, Masculinity, Femininity の順に高い評価を与えていること、個人的評価においても、男女とも Masculinity を Femininity より高く評価することを明らかにしている。これを踏まえると、社会的にも個人的にも評価の高いとされる伝統的な男性役割特性を暗黙のうちに期待された場合、女子中学生は性役割としての期待だと気づかず、単なる個人への期待としてその期待に沿った呈示を行った可能性と、性役割としての期待だと気づいたうえで積極的に期待に沿った呈示を行った可能性の2つが考えられる。一方で、社会的にも個人的にも評価の低いとされる伝統的な女性役割特性を期待された場合には、女子中学生は暗黙の性役割期待であっても、性役割としての期待に気づきやすく、女性役割特性の呈示を積極的には行わなかったと考えられる。性役割学習の観点からみると、暗黙の性役割期待を受けた場合であっても、女性は中学生の段階ですでに社会的、個人的に重要と評価していない女性役割特性の呈示については、主体的な選択がなされると推察される。そのため、結果的に男性に社会から期待される伝統的な男性役割特性を学習しやすいといえるだろう。なお、本研究では

行動として表れる呈示への影響に焦点をあてたため、実際に性役割としての期待だと受け取ったのか個人への期待だと受け取ったのかについては今後検討の余地がある。

これに対して、男子中学生では、期待に沿った性役割特性を呈示するという結果がみられず、予想（1）と予想（2）は支持されなかった。したがって、暗黙の性役割期待に沿った呈示を行うとはいえない。一方で、以下の理由から、男子中学生が役割期待を的確に認知し、自らの性役割観と照らしながら、主体的な選択にもとづいた役割を呈示するという性役割学習の段階に移行し終わっているとは考えにくい。青年期における心理的自立の発達の变化を検討した高坂・戸田（2006）は、性役割期待において男性的な課題である“自立する”という課題について、男子は強い困難を感じることなく適応することができる一方で、学校時代には心理的自立を獲得するような問題を感じる機会が少ないために、心理的自立の程度が中学生から大学生の間でほとんど上昇することがないのではないかとしている。また、柏木（1967）は、男子中学生は男女の性役割が未分化であると指摘している。本研究でみられた、すべての性役割特性において女子中学生よりも呈示得点が低く、性役割条件の間に差がみられないという男子中学生の結果は、これらの先行研究が示すような、男子中学生における性役割の未分化が呈示に表れたものである可能性が高いだろう。

性役割学習の過程には、期待の認知、選択と呈示があるが、このいずれかが発達途中にあると考えられる。男性は青年期前期以降に性役割取得から性役割学習へと移行していく可能性があり、発達段階による差を含め検討することが重要である。

なお、性役割は時代の変遷によって変動するものである。本研究では伝統的な性役割特性の呈示に焦点を当てたため、現代の中学生がそれらをどちらの性役割に関するものと認知し、重要視しているかを直接的に示すことはできない。したがって本研究で用いた性役割特性語についての認知や、またその自信はどの程度のものかといった点を含めた研究によって検討していく必要があるだろう。

#### 伝統的性役割観による自己呈示の違い

最後に、受け手の伝統的性役割観による影響について考察する。本研究では、すべての性役割特性の呈示において伝統的性役割観の高さに有意な差はみられなかったため、予想(4)は伝統的性役割を期待された場合のみ支持されたといえる。一方で、伝統的な性役割観が高い人は、自分の中に判断基準を明確にもっているため、非伝統的性役割を期待された場合は主体的な性役割特性の呈示、すなわち自らの性別に一致した伝統的性役割特性の呈示をしやすいとの予想は棄却された。これを踏まえると、伝統的性役割観が高く、性

役割選択の判断基準を明確にもっていたとしても、暗黙の性役割期待を受けた場合には性役割としての期待に気づきにくく、主体的な性役割特性の呈示が行えないといえる。ただし、対象が中学生であるため、伝統的性役割観が高いといっても、青年期後期以降の大学生と比べれば伝統的性役割観は発達途中にある可能性も考えられる。したがって、発達段階も含めた検討を行う必要がある。

研究 I では、青年期前期にある中学生が性役割期待を暗黙裡に受けた場合、女子中学生は、非伝統的な性役割期待を受けた際にその期待に沿った特性を演じやすいことが明らかになった。対して、男子中学生では期待に沿った伝統的な性役割特性の呈示がみられなかった。このことから、特に男子中学生がどのように性役割特性を取得し、自らの性役割として取り込んでいくのか、発達段階に着目した検討が必要であることが明らかになった。

## 第 2 章 実証的研究

### 第 2 節 研究Ⅱ

性役割期待を内包する言葉かけが青年期後期の大学生の自己呈示に及ぼす影響

## 目 的

暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、受け手の自己呈示がどのように影響を受けるか、発達の観点から明らかにするため、研究Ⅱでは、主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の大学生男女を対象とし、研究Ⅰと同様の 2 点を検討した。そして、研究Ⅰの予想 4 点と同様の予想に基づいて結果を考察した。また、研究Ⅱでは、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによって呈示が高まるかについて、より詳細に検討する。

## 方 法

### 調査協力者

H 大学の大学生および大学院生 179 名（男性 58 名、女性 121 名）を対象とし、性別ごとに伝統的性役割条件と非伝統的性役割条件に無作為に割り当てた。

### 場面設定

性役割条件の操作として、性別ごとに Figure 3 のような伝統的および非伝統的性役割条件の 2 種類の 3 コマストーリーが作成された。導入は条件共通の内容であり、「この春大学へ入学したあなたは、オリエンテーションの一環として、学生間で行われる交流会に参

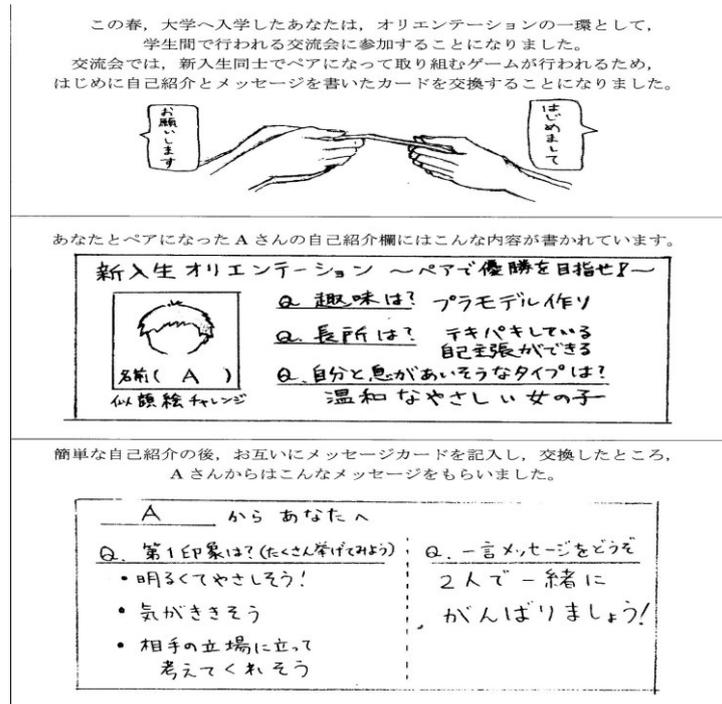


Figure 3 女子大学生を対象とした伝統的性役割条件の3コマストーリー

加することになった」とした。

性役割条件操作のため、研究 I と同様に、(a) 刺激人物の紹介コメントと、(b) 刺激人物からペアとなる調査協力者（ストーリー中では“あなた”と表記）へのコメントを以下のように設定した。なお、刺激人物と調査協力者は異性とし、刺激人物の紹介を示すことで、続くコメントを暗黙の性役割期待だと認知できる可能性を高めるよう操作した。

(a) 刺激人物の紹介コメント 刺激人物の伝統的あるいは非伝統的性役割を反映するような趣味や刺激人物の長所、異性のペアに期待される性格を、プリント内で紹介する場面とした。伝統的性役割の条件では、刺激人物（A さん）の性別に一致した性役割（例えば A さ

んが女性の場合は女性役割)に沿った趣味や長所が書かれており、ペアにはその性別に一致した性役割特性(例えば A さんが女性の場合は男性役割)をもつ異性があうという紹介内容である。一方、非伝統的性役割の条件では、伝統的性役割条件とは異なる性別の性役割に沿った刺激人物(B さん)の趣味や長所、ペアに期待される性役割が書かれている。

内容は、BSRI 日本語版(東, 1990, 1991)や M-H-F scale(伊藤, 1978)に用いられている性役割語を参考に作成した。男性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の場合、女性 A さんは「趣味;お菓子づくり, 長所;サポートやフォローがとくい, 自分と息があいそうなタイプ;しっかりした, ひっぱっていつてくれる男の子」, 非伝統的性役割条件の場合、女性 B さんは「趣味;プラモデル作り, 長所;てきぱきしている, 自己主張ができる, 自分と息があいそうなタイプ;温和なやさしい男の子」という紹介がなされている。

女性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の男性 A さんは女性 B さんと同様、非伝統的性役割条件の男性 B さんは女性 A さんと同様の内容である。なお、男性 A さん, 男性 B さんにおける「自分と息があいそうなタイプ」では「男の子」の部分のみ「女の子」と言い換えている。

(b)刺激人物から調査協力者へのコメント ペアとなる調査協力者に対して女性役割を期待

し評価するものと、男性役割を期待し評価するものの2種類のコメントにより、調査協力者に向けられる性役割期待を操作した。刺激人物の紹介と同様にBSRI日本語版(東, 1990, 1991)やM-H-F scale(伊藤, 1978)に用いられている性役割語を参考に作成された。男性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の場合、“あなた”の第一印象を女性Aさんは「積極的で行動力がありそう、頼りになりそう、ひっぱっていってくれそう」、非伝統的性役割条件の場合、女性Bさんは「明るくてやさしそう、気がききそう、相手の立場に立って考えてくれそう」といった3つのコメントが各条件でなされている。女性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の男性Aさんは女性Bさんと同様、非伝統的性役割条件の男性Bさんは女性Aさんと同様の内容である。なお、すべての条件において、この調査協力者へのコメントには(a)刺激人物の紹介コメントにおけるペアに期待される性役割(ストーリー上では「自分と息があいそうなタイプ」)に提示された性役割語の一部が含まれているが、完全に一致するものではない。

研究IIでは、ストーリーに違和感が生じないように、研究Iとは異なるストーリーを作成したが、上記に示したように、(a)の刺激人物紹介の内容や、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけに該当する(b)刺激人物からペアとなる調査協力者へのコメントの内容につ

いては同様の言葉を用いた。

## 質問紙の構成

**場面の提示** 「次のストーリーをよく読んで，“あなた”だったらどのように感じるか，右のページから始まる質問項目に回答してください」と教示文に示し，伝統的性役割条件または非伝統的性役割条件の場면을提示した。

**性役割に関する特性についての自己呈示の測定** 調査協力者の性役割に関する特性についての自己呈示を調査するために，M-H-F scale（伊藤，1978）から 25 項目（Masculinity 9 項目，Humanity 6 項目，Femininity 10 項目）を用いて<sup>6</sup>，7 件法で測定した。なお，研究Ⅱでは，暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによる影響をみるため，pre/post の 2 回，測定を行った。pre では，M-H-F scale（伊藤，1978）の個人の性役割意識を尋ねる教示文を用い，post では，教示文を「ストーリーを読んで，あなたは A/B さんに対して，自分自身をどのような人間に見てもらいたいと考えていますか？次のような形容詞がそのイメージにどの程度当てはまると思うか，もっとも近い数字を○でかこんでください」とした。

**伝統的性役割観の測定** 伝統的性役割観は，性差観スケール（伊藤，1997）30 項目から，

---

<sup>6</sup>研究Ⅱでは，pre/post を測定するにあたり，調査協力者の回答への負担を減らすため，研究Ⅰのデータを用いた因子分析の結果を参考に，M-H-F scale（伊藤，1978）から因子負荷量の低かった 5 項目を減らしている。

15項目を用いて、4件法で測定した。なお、測定のタイミングは性役割に関する特性についての自己呈示の post 測定後である。

### 倫理的配慮

調査するにあたり、結果は研究のみに用い、個人は特定されないこと、不快に感じた場合は途中で回答を止めて構わないことなどを質問紙に明記し、事前説明を行った。加えて回答後には、調査内容についてデブリーフィングを行った。

## 結果

### 信頼性の検討

本調査において用いた自己呈示の Masculinity 9項目、Humanity 6項目、Femininity 10項目、伝統的性役割観の15項目それぞれについて、信頼性を確認するために内的一貫性を検討した。その結果、Masculinity 項目の  $\alpha$  係数は.89、Humanity 項目の  $\alpha$  係数は.75、Femininity 項目の  $\alpha$  係数は.77、伝統的性役割観項目の  $\alpha$  係数は.81の値を示し、信頼性が確認された。したがって、以降の分析において Masculinity 項目の平均得点は伝統的な男性役割特性を呈示する得点（M 呈示得点）、Femininity 項目の平均得点は伝統的な女性役割特性を呈示する得点（F 呈示得点）とし、Humanity 項目の平均得点は性別に関わらず男

女ともに社会から期待される特性を呈示する得点（H 呈示得点）とした。

### 群ごとの平均値および標準偏差

伝統的性役割観の高さによって群分けを行うため、伝統的性役割観得点において調査協力者の性別による差がみられるかを t 検定により確認した。その結果、有意差はみられなかったため、男女込みの平均値で伝統的性役割観 High 群、Low 群に群分けした。分析にあたり、Table 2 に示したように、調査協力者の性別および性役割条件、伝統的性役割観 HL を組み合わせた 8 群における各得点の平均値および標準偏差を算出した。

Table 2 大学生における伝統的性役割観と性役割特性に関する自己呈示の各得点の平均と SD

		性役割観	pre M 呈示	pre F 呈示	pre H 呈示	post M 呈示	post F 呈示	post H 呈示	
女性	伝統的性役割条件	性役割観 H (n=29)	2.45 (0.23)	3.15 (0.82)	2.88 (0.67)	3.42 (0.57)	3.25 (0.96)	3.11 (0.87)	3.94 (0.97)
		性役割観 L (n=34)	1.65 (0.29)	2.95 (0.95)	2.51 (0.81)	3.14 (0.85)	3.10 (1.08)	2.76 (0.98)	3.72 (0.91)
	非伝統的性役割条件	性役割観 H (n=34)	2.29 (0.17)	3.08 (0.96)	2.63 (0.61)	3.18 (0.78)	4.13 (0.93)	2.60 (0.77)	4.05 (0.55)
		性役割観 L (n=24)	1.64 (0.28)	3.08 (1.01)	2.64 (0.73)	3.29 (0.77)	3.46 (0.90)	2.65 (0.72)	3.70 (0.74)
男性	伝統的性役割条件	性役割観 H (n=9)	2.44 (0.46)	3.00 (1.02)	2.89 (0.43)	3.20 (0.70)	3.68 (0.88)	2.79 (0.50)	3.56 (0.68)
		性役割観 L (n=16)	1.75 (0.30)	2.92 (0.80)	2.76 (0.39)	3.17 (0.50)	3.83 (0.76)	2.40 (0.78)	3.79 (0.66)
	非伝統的性役割条件	性役割観 H (n=19)	2.36 (0.23)	3.44 (0.92)	2.72 (0.54)	3.81 (0.96)	3.91 (1.14)	2.73 (1.13)	4.34 (1.01)
		性役割観 L (n=14)	1.61 (0.32)	2.72 (1.05)	2.28 (0.71)	3.11 (0.98)	3.10 (1.03)	2.39 (0.80)	3.58 (0.88)

注) ( )内は SD を示している。

## 男性役割特性呈示の条件による差異

M 呈示得点について、pre/post×性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行った。その結果、pre/post の主効果が有意であり ( $F(1, 171) = 23.88, p < .001, \eta^2 = .12$ )、post のほうが pre よりも M 呈示得点が高かった。伝統的性役割観 HL の主効果にも有意差がみられ ( $F(1, 171) = 7.08, p < .01, \eta^2 = .04$ )、伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも M 呈示得点が高かった。

また、性役割条件×伝統的性役割観 HL における交互作用 ( $F(1, 171) = 4.18, p < .05, \eta^2 = .02$ ) が有意であった。下位検定を行ったところ、Figure 4 にみられるように、伝統的性役割観 H 群において非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 171) = 8.72, p < .01$ )、非伝統的性役割条件において伝統的性役割観 H 群のほうが伝統的性役割

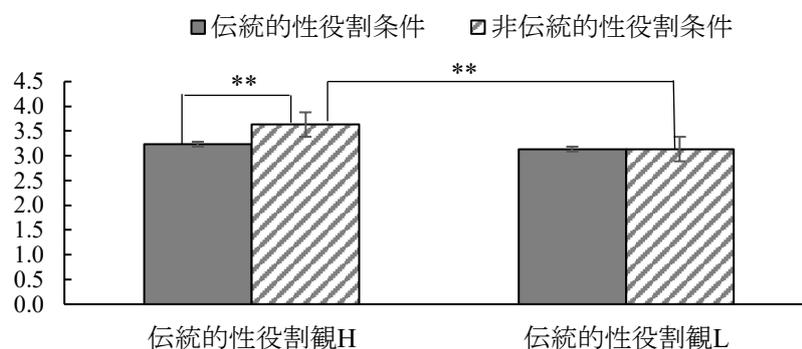


Figure 4 大学生男性役割特性呈示得点の性役割条件×伝統的性役割観HLの交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 (\*\* $p < .01$ ) を示している。

観 L 群より ( $F(1, 171) = 12.22, p < .01$ ) M 呈示得点が有意に高かった。

さらに, pre/post × 性別 × 性役割条件における 2 次の交互作用 ( $F(1, 171) = 5.32, p < .05, \eta^2 = .03$ ) においても有意差がみられた。下位検定を行ったところ, post における性別 × 性役割条件 ( $F(1, 175) = 12.15, p < .01$ ), 女性における性役割条件 × pre/post ( $F(1, 175) = 7.95, p < .01$ ), 伝統的性役割条件における性別 × pre/post ( $F(1, 175) = 7.08, p < .01$ ) の単純交互作用が有意であった。Figure 5 にみられるように, post において, 伝統的性役割条件では男性のほうが女性より ( $F(1, 175) = 10.16, p < .01$ ), 女性では非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 175) = 14.25, p < .001$ ) M 呈示得点が有意に高かった。また, 伝統的性役割条件において, post では男性のほうが女性より ( $F(1, 175) = 10.87, p < .01$ ), 男性では post のほうが pre より ( $F(1, 175) = 10.47, p < .01$ ) M 呈示得点が有意に高かった。非伝統的性役割条件においては, 女性において post のほうが pre より ( $F(1, 175) = 21.29, p < .001$ ) M 呈示得点が有意に高かった。女性において, post では非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 175) = 14.24, p < .001$ ), 非伝統的性役割条件では post のほうが pre より ( $F(1, 175) = 21.29, p < .001$ ) M 呈示得点が有意に高かった。

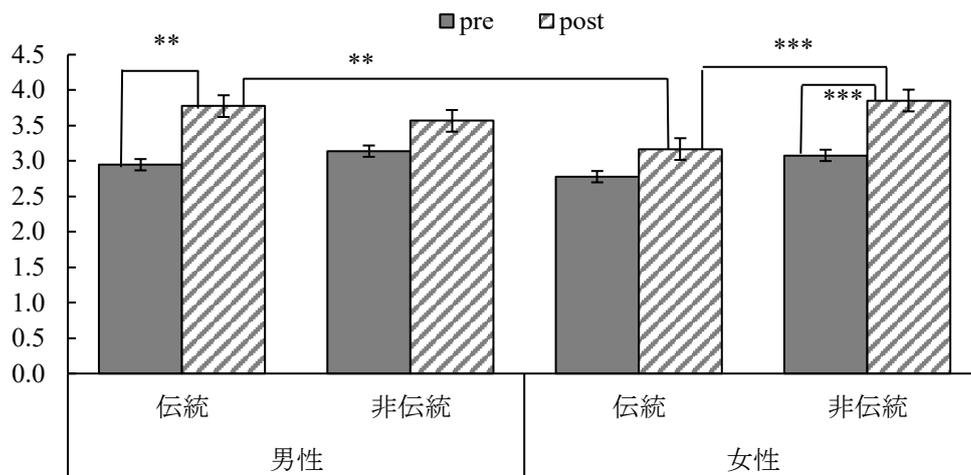


Figure 5 大学生男性役割特性呈示得点における pre/post×性別×性役割条件の交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 (\*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ ) を示している。

#### 女性役割特性呈示の条件による差異

F 呈示得点について、pre/post×性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行った。その結果、伝統的性役割観 HL の主効果が有意であり ( $F(1, 171) = 5.18$ ,  $p<.05$ ,  $\eta^2=.03$ )、伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも F 呈示得点が高かった。

また、pre/post×性別×性役割条件における 2 次の交互作用 ( $F(1, 171) = 4.18$ ,  $p<.05$ ,  $\eta^2=.02$ ) においても有意差がみられた。下位検定を行ったところ、伝統的性役割条件における性別×pre/post ( $F(1, 171) = 7.56$ ,  $p<.01$ ) の単純交互作用が有意であった。Figure 6 にみられるように、伝統的性役割条件において、post では女性のほうが男性より ( $F(1, 171) = 5.34$ ,  $p<.05$ )、女性では post のほうが pre より ( $F(1, 171) = 5.82$ ,  $p<.05$ ) F 呈示

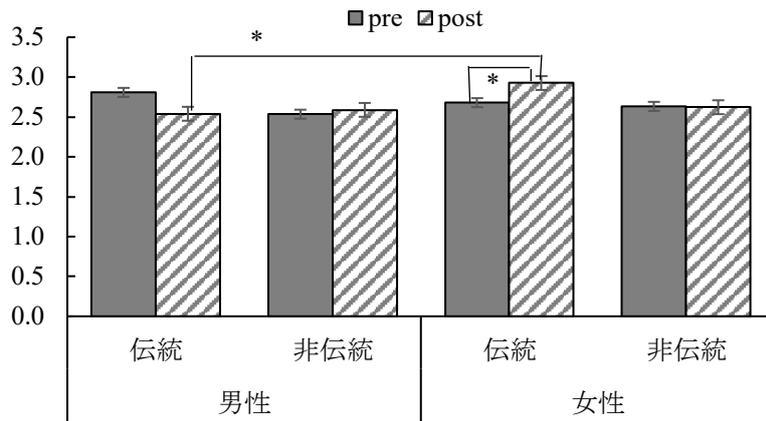


Figure 6 大学生女性役割特性呈示における pre/post×性別×性役割条件の交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 (\* $p<.05$ ) を示している。

得点が有意に高かった。

#### 人間性呈示の条件による差異

H 呈示得点について、pre/post×性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行った。その結果、pre/post の主効果が有意であり ( $F(1, 171) = 48.33, p < .001, \eta^2 = .22$ ), post のほうが pre よりも H 呈示得点が高かった。伝統的性役割観 HL の主効果においても有意差がみられ ( $F(1, 171) = 5.65, p < .05, \eta^2 = .03$ ), 伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも H 呈示得点が高かった。

また、性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL における 2 次の交互作用においても有意差がみられた ( $F(1, 171) = 5.23, p < .05, \eta^2 = .03$ )。下位検定を行ったところ、男性におけ

る性役割条件×伝統的性役割観 HL ( $F(1, 171) = 7.08, p < .01$ ), 伝統的性役割観 H 群に

おける性別×性役割条件 ( $F(1, 171) = 4.44, p < .05$ ) の単純交互作用が有意であった。

Figure 7 にみられるように、男性において、非伝統的性役割条件では伝統的性役割観 H 群

のほうが L 群より ( $F(1, 171) = 12.00, p < .01$ ), 伝統的性役割観 H 群では非伝統的性役

割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 171) = 11.24, p < .01$ ) H 呈示得点が有意に

高かった。また、伝統的性役割観 H 群において、男性では非伝統的性役割条件のほうが

伝統的性役割条件より ( $F(1, 171) = 11.22, p < .01$ ) H 呈示得点が有意に高かった。

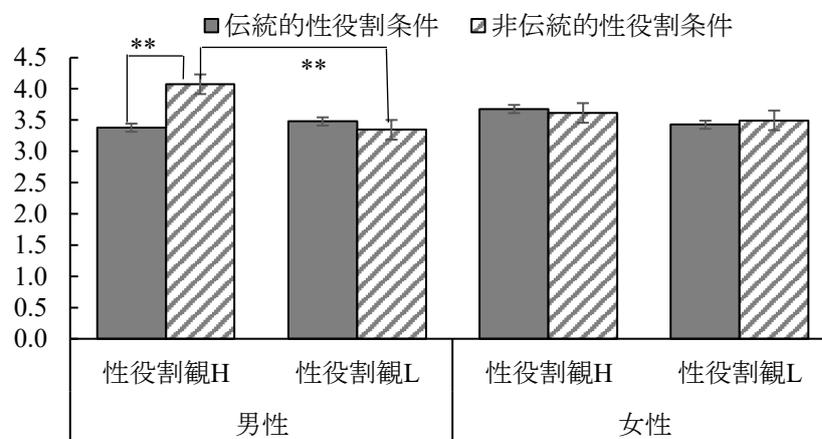


Figure 7 大学生人間性呈示における性別×性役割条件×伝統的性役割観HLの交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 ( $p < .01$ ) を示している。

## 考 察

研究Ⅱにおいても、研究Ⅰと同様に、以下の4つの予想を立て、性役割期待を内包する言葉かけの影響を検討した。(1) 伝統的性役割を期待された場合、男性は男性役割特性を高く呈示し、女性は女性役割特性を高く呈示する。(2) 非伝統的性役割を期待された場合、男性は女性役割特性を高く呈示し、女性は男性役割特性を高く呈示する。(3) 男女ともに期待される人間性は、性役割期待の種類や受け手の性別に関わらず高く呈示される。(4) 伝統的性役割を期待された場合、伝統的性役割観の高さに関わらず期待に沿った呈示を行うが、非伝統的性役割を期待された場合、伝統的性役割観が高い人は自らの性別に一致する伝統的性役割特性を呈示する。加えて、pre/post を測定することで、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによって、対応する性役割特性の呈示が高まるかどうかについても検討した。

### 性役割期待を内包する言葉かけの効果とその性差

女子大学生については、予想(1)と(2)を支持する結果が得られ、主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の女子大学生においても、送り手の性役割期待に沿うような呈示を行うことが示唆された。しかし、非伝統的な性役割期待を受けた場

合もその期待に沿う呈示を行っていたことから、伝統的な女性役割に縛られているわけではなく、男性役割特性に対しても受容しているといえる。性役割特性におけるそれぞれの境界が薄まりつつある可能性も考えられる。

一方で、男子大学生については、予想（1）を支持する結果は得られたが、予想（2）については棄却された。期待に沿った呈示がなされていたならば、女性役割を期待された男性の非伝統的性役割条件と男性役割を期待された女性の非伝統的性役割条件の間にも、男性役割特性および女性役割特性の呈示に差がみられるはずだが、有意差は確認されなかった。さらに、男性では、性役割期待を受けた後の男性役割特性呈示において、性役割条件間に差がみられず、女性役割特性を期待する言葉かけを受けても、その前後で女性役割特性の呈示に差がなかった。これらの結果をあわせると、男子大学生は女子大学生に比べ、女性役割特性を期待された場合でも、女性役割特性を呈示せず、期待されていない男性役割特性を呈示することが示唆されたといえる。男性は伝統的な男性役割に縛られており、逸脱に対し社会的な罰が大きいことや（渡邊, 2017; Moss-Racusin, Phelan, & Rudman, 2010）、一般的に社会で重要とされる特性の評価において *Femininity* には極端に低い価値が与えられていること（後藤・廣岡, 2003）が、男子大学生の呈示に影響していると考えられる

だろう。他方で、伝統的性役割観をもつ男子大学生については、人間性を呈示することにより、自らの望む性役割と送り手の性役割期待との間でバランスをとっていることが明らかとなった。性役割期待を的確に認知したうえで、主体的な選択にもとづいた役割を呈示することが適応的な性役割学習であるならば、人間性を呈示することでバランスをとろうとすることは適応的だといえる。

#### 伝統的性役割観による自己呈示の違い

伝統的性役割観の影響については、男子大学生のみ男性役割特性の呈示において予想(4)を支持する結果が得られた。一方で、女子大学生では、女性役割特性の呈示において予想(4)を支持する結果は得られず、加えて非伝統的性役割を期待された場合であっても伝統的性役割観が高い人のほうが男性役割特性を呈示していた。女性はこれまで男性役割とされてきた特性を積極的に女性役割に取り入れて、社会的により望ましい女性役割を作り上げている(後藤・廣岡, 2003)と指摘されており、本研究においても伝統的性役割観の高い女性が、男性役割特性を新たな女性役割特性として取り込み、主体的かつ積極的に男性役割特性の呈示を行っていた可能性が示唆された。

研究Ⅱでは、主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の女子大学

生においても、送り手の性役割期待に沿うような性役割特性の呈示を行うことが明らかにされた。一方、男子大学生については伝統的な男性役割に縛られ、女性役割特性を受容していないことが示唆された。また、人間性の呈示が青年の適応に重要な役割を果たす可能性が示唆された。このことから、今後は性役割期待を受けた際に人間性を呈示することで、不安が低減するなどのポジティブな影響がみられるのか、人間性の呈示が適応に及ぼす影響についても詳細を検討していく必要がある。

## 第 2 章 実証的研究

### 第 3 節 研究Ⅲ

性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示に及ぼす影響における発達段階比較

## 目 的

同年代の異性からの性役割期待を内包する言葉かけが受け手の自己呈示に及ぼす影響を発達の視点から明らかにするため、研究Ⅲでは、研究ⅠとⅡで得られた青年期前期の中学生男女と青年期後期の大学生男女のデータを用いて、発達段階により差がみられるのかを検討した。

## 方 法

研究Ⅰおよび研究Ⅱで得られた H 大学附属中学校の中学生 151 名（男性 77 名，女性 74 名），H 大学の大学生および大学院生 179 名（男性 58 名，女性 121 名）のデータを用いて、発達段階による違いを含めて検討した。なお，大学生の自己呈示については post データを用いた。

## 結 果

伝統的性役割観の高さによって群分けを行うにあたり，伝統的性役割観得点において発達段階や性別による差がみられるかを確認した。伝統的性役割観得点を従属変数として発達段階×性別の 2 要因分散分析を行った。その結果，発達段階の主効果 ( $F(1, 326)=10.39$ ,  $p<.01$ ,  $\eta^2=.03$ ) が有意であり，中学生のほうが大学生よりも伝統的性役割観得点が高かつ

た。そのため、発達段階ごとの平均値に基づいて、伝統的性役割観 High 群, Low 群に群

分けした。分析にあたり, Table 3 に示すように性別および性役割条件, 伝統的性役割観

HL を組み合わせた 8 群における各得点の平均値および標準偏差を算出した。

Table 3 各群における伝統的性役割観と各性役割特性に関する自己呈示の平均値と SD

			伝統的性役割観	M 呈示	F 呈示	H 呈示	
大学生	男性	伝統的性役割条件	性役割観 H	2.4 (0.46)	3.7 (0.88)	2.8 (0.50)	3.6 (0.68)
			性役割観 L	1.7 (0.30)	3.8 (0.76)	2.4 (0.78)	3.8 (0.66)
		非伝統的性役割条件	性役割観 H	2.4 (0.23)	3.9 (1.14)	2.7 (1.13)	4.3 (1.01)
			性役割観 L	1.6 (0.32)	3.1 (1.03)	2.4 (0.80)	3.6 (0.88)
	女性	伝統的性役割条件	性役割観 H	2.4 (0.23)	3.2 (0.96)	3.1 (0.87)	3.9 (0.97)
			性役割観 L	1.6 (0.29)	3.1 (1.08)	2.8 (0.98)	3.7 (0.91)
		非伝統的性役割条件	性役割観 H	2.3 (0.17)	4.1 (0.93)	2.6 (0.77)	4.0 (0.55)
			性役割観 L	1.6 (0.28)	3.5 (0.90)	2.7 (0.72)	3.7 (0.74)
中学生	男性	伝統的性役割条件	性役割観 H	2.6 (0.29)	3.3 (1.26)	2.6 (1.10)	3.5 (0.94)
			性役割観 L	1.8 (0.29)	2.9 (1.11)	2.3 (1.19)	3.2 (1.14)
		非伝統的性役割条件	性役割観 H	2.6 (0.35)	2.9 (1.25)	2.4 (0.95)	3.3 (1.29)
			性役割観 L	1.7 (0.40)	2.3 (1.42)	2.2 (1.23)	2.7 (1.56)
	女性	伝統的性役割条件	性役割観 H	2.6 (0.34)	3.2 (0.71)	2.9 (0.93)	3.6 (1.02)
			性役割観 L	1.7 (0.38)	3.0 (1.16)	2.6 (1.11)	3.5 (1.15)
		非伝統的性役割条件	性役割観 H	2.6 (0.27)	3.5 (0.57)	2.9 (0.70)	3.9 (0.68)
			性役割観 L	1.7 (0.41)	3.6 (1.01)	2.7 (1.06)	4.0 (0.92)

注) ( )内は SD を示している。

## 男性役割特性呈示の条件による差異

M 呈示得点について、発達段階×性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行った。その結果、発達段階の主効果が有意であり ( $F(1, 314) = 14.75, p < .001, \eta^2 = .05$ )、大学生のほうが中学生よりも M 呈示得点が高かった。伝統的性役割観 HL の主効果にも有意差がみられ ( $F(1, 314) = 6.56, p < .05, \eta^2 = .02$ )、伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも M 呈示得点が高かった。

また、発達段階と性別における交互作用 ( $F(1, 314) = 6.50, p < .05, \eta^2 = .02$ )、性別と性役割条件における交互作用 ( $F(1, 314) = 13.99, p < .001, \eta^2 = .04$ ) が有意であった。それぞれ下位検定を行ったところ、Figure 8 にみられるように、男性において大学生のほうが中学生より ( $F(1, 314) = 17.45, p < .001$ )、中学生において女性のほうが男性より ( $F(1, 314) = 5.69, p < .05$ ) M 呈示得点が有意に高かった。また、Figure 9 にみられるように、女性において非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 314) = 16.21, p < .001$ )、非伝統的性役割条件において女性のほうが男性より ( $F(1, 314) = 15.95, p < .001$ ) M 呈示得点が有意に高かった。

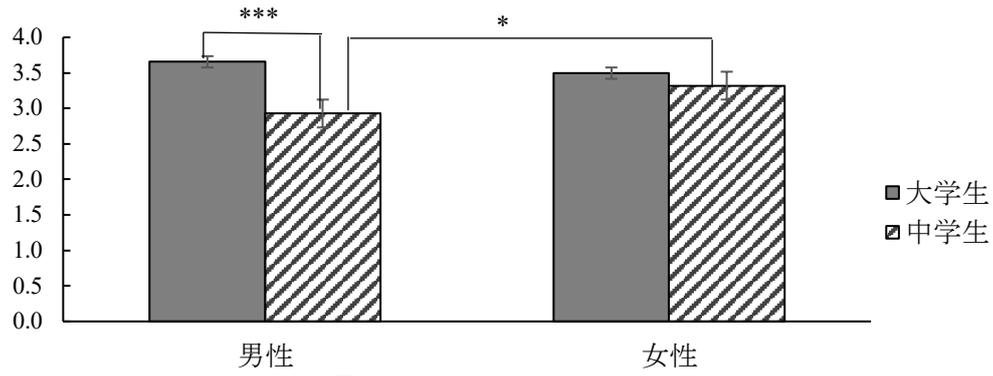


Figure 8 男性役割特性呈示における  
発達段階×性別の交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 (\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$ ) を示している。

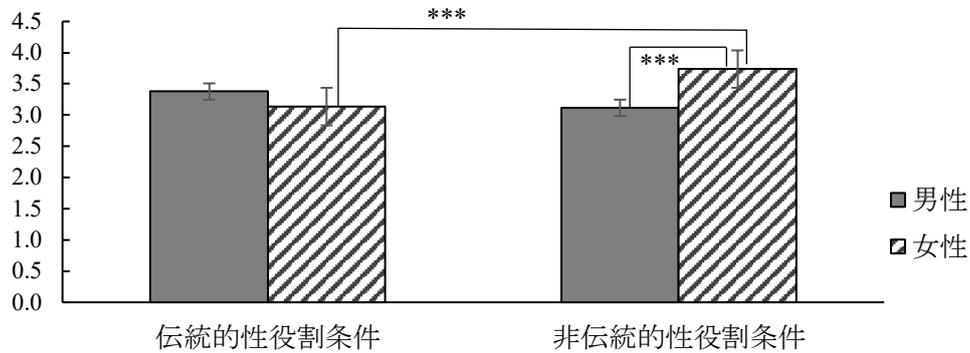


Figure 9 男性役割特性呈示における  
性別×性役割条件の交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 (\*\* $p<.001$ ) を示している。

#### 女性役割特性呈示の条件による差異

F 呈示得点について、発達段階×性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果が有意であり ( $F(1, 314) = 7.93, p < .01, \eta^2 = .03$ )、女性のほうが男性よりも F 呈示得点が高かった。伝統的性役割観 HL の主効果にも有意差がみられ ( $F(1, 314) = 5.35, p < .05, \eta^2 = .02$ )、伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも F 呈示得点が高かった。

## 人間性特性呈示の条件による差異

H 呈示得点について、発達段階×性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行った。その結果、発達段階の主効果が有意であり ( $F(1, 314) = 10.11, p < .01, \eta^2 = .03$ ), 大学生のほうが中学生よりも H 呈示得点が高かった。また、性別の主効果が有意であり ( $F(1, 314) = 7.27, p < .01, \eta^2 = .02$ ), 女性のほうが男性よりも H 呈示得点が高かった。伝統的性役割観 HL の主効果においても有意差がみられ ( $F(1, 314) = 4.78, p < .05, \eta^2 = .02$ ), 伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも H 呈示得点が高かった。

また、発達段階と性別における交互作用が有意であった ( $F(1, 314) = 5.79, p < .05, \eta^2 = .02$ )。下位検定を行ったところ、Figure 10 にみられるように、男性において大学生のほうが中学生より ( $F(1, 314) = 15.80, p < .001$ ), 中学生において女性のほうが男性より ( $F(1, 314) = 10.32, p < .01$ ) H 呈示得点有意に高かった。さらに、発達段階と性別と性役割条件における 2 次の交互作用においても有意差がみられた ( $F(1, 314) = 4.46, p < .05, \eta^2 = .01$ )。下位検定を行ったところ、非伝統的性役割条件における発達段階と性別の単純交互作用 ( $F(1, 314) = 5.45, p < .05$ ) が有意であった。Figure 11 にみられるように、非伝統的性役割条件において、男性では大学生のほうが中学生より ( $F(1, 314) = 14.61, p < .001$ ), 中学

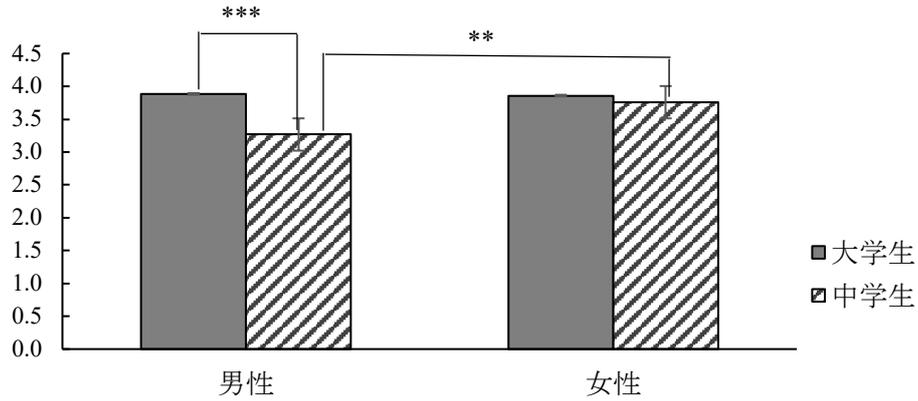


Figure 10 人間性呈示における  
発達段階×性別の交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 (\*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ ) を示している。

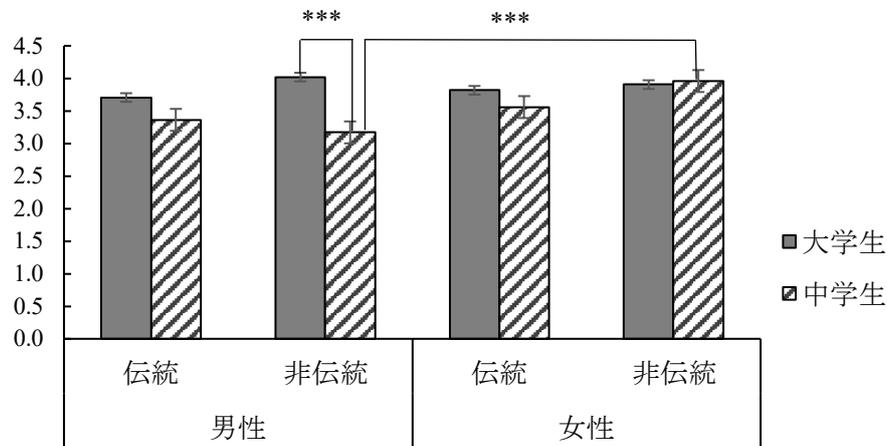


Figure 11 人間性呈示における  
発達段階×性別×性役割条件の交互作用

注) 有意差が認められた部分については有意水準 (\*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ ) を示している。

生では女性のほうが男性より ( $F(1, 314) = 12.95, p < .001$ ) H 呈示得点が有意に高かった。

## 考 察

本研究の目的は、性役割取得から性役割学習への移行期にあると考えられる青年期前期の中学生男女と、より主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の大学生男女を対象とし、発達段階や性別、伝統的性役割観の高さによって、暗黙の性役割期

待を受けた後の自己呈示に差がみられるのかを明らかにすることであった。

## 男性役割特性呈示

伝統的な男性役割特性の呈示においては、発達段階と性別、性別と性役割期待条件に交互作用がみられた。以下では、下位検定の結果にもとづいて考察していく。男性においてのみ発達段階による差がみられ、大学生のほうが中学生よりも男性役割特性を呈示していた。また、男子中学生は予想に反して、男性が社会的に期待される男性役割特性を女子中学生よりも呈示していなかった。この結果は、男性の性役割取得から性役割学習への移行が女性に比べると遅く、男子中学生は男性役割を取得している段階にある可能性を示唆している。男性は大学生になると、中学生よりも男性役割特性の呈示が高くなっていたため、青年期前期から後期にかけて、男性役割特性を取得し、主体的に男性役割特性を選択、呈示するように発達していくといえる。柏木（1972）では、性役割認知の発達には被験者の性による差があり、男子では年齢による変動が顕著であることが示されており、本研究の結果から、柏木の見いだした性差が自己呈示でもみられることを確認できた。また、男性において性役割条件による差がみられなかったことから、男性は性役割期待に関わらず常に男性役割特性を呈示しようとしていることが示された。伝統的な男性役割に対する態度

について尺度開発および男女比較を行った渡邊（2017）は、男女を比較すると依然として男性の方が伝統的な男性役割に縛られていると推察し、男性が男性役割から逸脱することは、女性が女性役割から逸脱するよりも社会的な罰が大きい（Moss-Racusin, Phelan, & Rudman, 2010）ことを理由に挙げている。本研究の結果は、男性役割特性の呈示の側面においてこれを支持するものであったといえよう。

対して、女性は発達段階による差や、大学生における性差がみられなかった。また、非伝統的性役割期待を内包する言葉かけを受けた場合、伝統的性役割期待を受けた場合よりも男性役割特性を呈示しており、期待に沿うような性役割特性の呈示を行っていた。女性は、中学生の段階で性役割取得から性役割学習への移行が済んでおり、主体的に男性役割特性を選択し、呈示することが可能になっていると考えられる。男子大学生と女子中学生および女子大学生が、同程度の男性役割特性呈示を行っていたことから、女性は社会的に期待される女性役割には当てはまらない男性役割特性についても、葛藤なく呈示を行うといえるだろう。M-H-F scale（伊藤，1978）を用いて現代の大学生の性役割認知を検討した後藤・廣岡（2003）では、個人的に重要とされる特性の評価において、男女とも Masculinity を Femininity より高く評価していたことが明らかにされている。これを踏まえると、女性

にとって自らも望ましいと考える男性役割特性を十分に相手に示すことができる状況,すなわち非伝統的性役割を期待された場合は,相手の期待をただ受容したのではなく,積極的に男性役割特性を呈示することを選んだと解釈できる。

## 女性役割特性呈示

伝統的な女性役割特性の呈示においては,性別において主効果がみられた。女性は男性よりも女性役割特性を呈示しており,女性役割特性は社会的に女性に期待される特性であることを踏まえると,予想どおりの結果であったといえる。しかしながら,発達段階においては主効果がみられず,交互作用についても確認されなかった。このことから,男性役割特性と異なり,女性役割特性については青年期前期から後期にかけて変容がみられないことがわかる。女性に関しては,男性役割特性の呈示においても発達段階による差がみられなかったため,女性役割特性についてもすでに中学生の段階で性役割学習への移行が済んでいた可能性があるだろう。後藤・廣岡(2003)で明らかにされたように Femininity には極端に低い価値が与えられており,女性役割特性による印象操作は行われにくいことが推察される。そのため,女性において性役割条件で有意差がみられなかったと考えられる。一方,男性に関しては,男性役割特性の結果も踏まえると,異性に期待される女性役割特

性について優先的に性役割学習への移行が行われたとは考えにくく、男子中学生は男女双方の性役割特性を取得している段階にある可能性が高い。また、性役割学習への移行が済み、主体的に性役割を選択、呈示することが可能な段階にあるはずの男子大学生が、中学生と同程度の女性役割特性を呈示していた。これは、女性役割特性について極端に低い価値が与えられており、なおかつ男性が女性役割特性を呈示することは男性役割からの逸脱となるために、男性が女性役割特性の呈示を回避しようとしている可能性を示唆している。

### 人間性呈示

人間性の呈示においては、発達段階と性別と性役割期待条件において交互作用がみられた。下位検定の結果にもとづいて考察していく。非伝統的性役割期待を受けた男性において発達段階による差がみられ、大学生のほうが中学生よりも人間性を呈示していた。また、非伝統的性役割期待を受けた中学生において性別による差がみられ、女性のほうが男性よりも人間性を呈示していた。この結果は、他の性役割に関する2特性と同様に、男子中学生の性役割学習への移行が女子中学生と比べると遅いことを示すものであると考えられる。しかし、それだけでは非伝統的性役割条件のみで差がみられたことを説明できない。したがって、男子大学生や女子中学生の視点から考察していく。

男子大学生は非伝統的性役割条件において、女性役割特性を期待されているため、伝統的性役割条件よりも女性役割特性を呈示することが予想されていた。しかし、結果から非伝統的性役割を期待された場合、女性役割特性の呈示を回避しようとし、他方で男性役割特性の呈示を選択していたと解釈された。この場合、男子大学生は期待に沿わない性役割特性の呈示を行っていることになる。ここで人間性の呈示を組み合わせる意義がみえてくるのではないだろうか。すなわち、男子大学生は非伝統的性役割期待を受けた場合、自らも重要視している人間性を呈示することによって次善策として期待に沿おうと試みているのである。人間性については、一般的に社会で重要とされる特性の評価において男女ともに一番高い評価が与えられている（後藤・廣岡，2003）。男性役割特性や女性役割特性に属さないが、社会的に望ましい人間性を呈示することは、相手の期待が伝統的、非伝統的のどちらであってもネガティブな評価を受けにくい。そのため、ニュートラルな特性として人間性の呈示を選択しやすいと考えられる。

女子中学生においても、人間性はニュートラルな特性として用いられた可能性が高い。しかし、男子大学生の場合と異なり、女子中学生は非伝統的性役割として男性役割特性を期待された場合、期待に沿うような男性役割特性を呈示している。それにもかかわらず、

人間性の呈示がなされていたことから、女子中学生は男性役割特性による過度な印象が形成されることを避けようとしたことが推察される。ニュートラルな性役割特性であり、女性役割特性よりも高い評価を得られる人間性は、女子中学生にとって印象を調整する重要な役割を担っていることが示唆されたといえる。これまで、性役割については男性役割と女性役割という 2 側面から検討されてきたが、本研究において人間性を呈示することで印象を調整していることが示唆され、研究Ⅱと同様に、適応的な性役割学習に対して人間性が重要な役割を果たす可能性が示唆された。

#### 伝統的性役割観による自己呈示の違い

最後に、主体的な性役割選択を行う際に必要となる判断基準になると考えられる受け手の性役割観に関して考察する。本研究では、伝統的性役割観の高さによって High 群 Low 群に群分けする際、発達段階と性別の 2 要因分散分析を行ったが、中学生のほうが大学生よりも性役割観得点が高いという結果が得られた。児童期から青年期にかけて受動的な性役割取得から主体的能動的な性役割学習へと変化が生じるという柏木（1967）の指摘を踏まえると、青年期前期にある中学生は、児童期に受動的に取得した伝統的な性役割の影響を強く受けていると考えられる。青年期後期になると主体性が増すため、自らの価値観を

性役割観にも反映することができるようになるのではないだろうか。

性役割特性に関する自己呈示への影響としては、どの特性においても伝統的な性役割観をもっている人ほど、呈示得点が高くなっていた。このことから、伝統的な性役割観が高い人は、相手の性役割期待が伝統的か非伝統的かに関わらず、自分の中に判断基準を明確にもっているため主体的な性役割特性の呈示をしやすいことが考えられる。対して、伝統的な性役割観が低い人は、非伝統的な性役割観として対立する具体的な価値観を確立しているというよりも、性役割観を確立していない状態にあると捉えることができる。そのため、伝統的な性役割観が高い人よりも性役割選択の判断基準が漠然としており、性役割特性に関する呈示得点が一様に低くなりやすいのではないだろうか。

研究Ⅲでは、暗黙の性役割期待が性役割特性の自己呈示に及ぼす影響において、発達段階によって違いがあることが明らかになった。特に、男性において発達段階による差が顕著であった。男子中学生は主体的な性役割学習への移行が遅い一方で、身体的には第二次性徴をむかえるため、周囲から男性役割期待を受ける機会が増加する可能性がある。青年期後期にある男子大学生の結果も踏まえると、男性が青年期前期に受けた男性役割期待は、受動的な男性役割の取得を促し、のちに自己呈示を通じた伝統的な性役割の強化、再生産

へとつながっているのではないだろうか。これまで、従来の関連研究ではあまり着目されてこなかった男性についても対象として検討していくことの重要性が示されたといえる。

今後、青年期前期から後期にかけ、性役割が発達していく中で、男性がどのように自己呈示を行っていくのか、青年期中期にあたる高校生を対象とした、詳細な調査が必要である。

なお、中学生と大学生の発達差を比較するにあたり、本研究で対象としたのは H 大学の附属中学校に所属する中学生や H 大学の教育学部に所属する大学生であった。そのため、発達段階による差以外にも、地域や学校による特色、家庭背景、世代背景等、年齢以外の点で影響がみられた可能性も考えられる。したがって、今後はより多様なサンプルを対象とし、検討していく必要がある。

## 第 2 章 実証的研究

### 第 4 節 研究IV

性役割期待を内包する言葉かけが自己呈示とパフォーマンスに及ぼす影響

## 目 的

研究Ⅳでは、青年期後期の大学生男女を対象とし、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけが伝統的であるかによって、自己呈示やパフォーマンスがどのように影響を受け、変化するのか、実験的に検討することを目的とした。研究Ⅳでは、研究ⅠとⅡと同様、以下の(1)から(4)の結果を予想するとともに、パフォーマンスへの影響については、(5)の結果を予想した。

(1) 伝統的性役割を期待された場合、男性は男性役割特性を高く呈示し、女性は女性役割特性を高く呈示する。(2) 非伝統的性役割を期待された場合、男性は女性役割特性を高く呈示し、女性は男性役割特性を高く呈示する。(3) 男女ともに期待される人間性は、性役割期待の種類や受け手の性別に関わらず高く呈示される。(4) 伝統的性役割を期待された場合、伝統的性役割観の高さに関わらず期待に沿った呈示を行うが、非伝統的性役割を期待された場合、伝統的性役割観が高い人は自らの性別に一致する伝統的性役割特性を呈示する。(5) 期待された性役割特性に対するネガティブなステレオタイプに従って、該当するパフォーマンス課題の得点は低下する。

## 方法

### 実験参加者

実験への参加を承諾した H 大学の大学生および大学院生 53 名 (女性 33 名, 男性 20 名)

が参加した。

### 実験計画

実験参加者の性別 (女性, 男性) × 実験参加者の性役割観 (伝統的性役割観の高低) × 刺激動画の種類 (伝統的性役割刺激, 非伝統的性役割刺激) の 3 要因参加者間計画で行われた。

### 性役割観

性役割観は, 性差観スケール (伊藤, 1997) から因子負荷量が .50 以上の 16 項目を用いて, 4 件法 (1; そう思わない ~ 4; そう思う) で測定した。得点が低いほど, 性役割に対して平等主義的な態度をもち, 伝統的性役割観をもっていないと考えられる。実験の事前調査で測定し, 実験参加者の平均値を基準として伝統的性役割観 High 群と Low 群に分けた。

### 刺激動画

刺激動画は, 伝統的あるいは非伝統的性役割刺激の 2 種類が作成された。各動画とも刺激人物の自己紹介と参加者に対するコメントから成り立っていた。自己紹介部分は, 実験者による

インタビューに回答する形式で作られ、コメント部分は、実験参加者の動画が提示されているように見えるパソコン画面を視聴しながらコメントする形式で作成された。作成する際、パソコン画面は撮影されない角度にし、イヤホンを用いて視聴音も聞こえない動画にした。

**(A) 刺激人物の自己紹介部分** 刺激人物は、大学院生または大学生の男女各 1 名が演じ、参加者にとって異性となるように組み合わせた。自己紹介では、刺激人物の伝統的あるいは非伝統的性役割を反映するように、所属学部や趣味、友人からよく言われること、異性のペアに求めることについてのインタビューに対して答える形式にした。伝統的性役割の自己紹介では、刺激人物自身の性別に一致した性役割(例えば男性刺激人物の場合は男性役割)に沿って自己紹介し、異性にはその性別に一致した性役割(例えば男性刺激人物の場合は女性役割)を期待する内容を答える。一方、非伝統的性役割の自己紹介では、男女の性役割が相補的で対になるものという捉えから、伝統的性役割の自己紹介とは異なる性別の性役割に沿った自己紹介と性役割期待を答える。自己紹介内容は、BSRI 日本語版(東, 1990, 1991)や M-H-F scale(伊藤, 1978)に用いられている性役割語を参考に作成し、大学教員 1 名および大学院生 4 名によって協議、確認したものをを用いた。

**(B) 刺激人物のコメント部分** 刺激人物のコメントは、参加者に対して女性役割を期待し評価す

るものと、男性役割を期待し評価するものの2種類があり、自己紹介部分と同様にBSRI日本語版(東, 1990, 1991)やM-H-F scale(伊藤, 1978)に用いられている性役割語を参考に組み合わせて作成された。大学院生12名を対象とした予備調査で、コメントを受けた人は男女どちらだと思うか(6件法; 1: 間違いなく男性~6: 間違いなく女性)の評定に違いがあり(女性役割コメント:  $\bar{X}=4.5$ ,  $SD=0.84$ ; 男性役割コメント:  $\bar{X}=3.0$ ,  $SD=1.41$ ;  $t(10)=2.24$ ,  $p<.05$ )、女性役割コメントを受けた人は女性であると認知されやすいことを確認した。伝統的性役割刺激動画では、伝統的性役割を反映する刺激人物の自己紹介と参加者の性別に一致する性役割を期待し評価するコメントを組み合わせ、非伝統的性役割刺激動画では、非伝統的性役割を反映する刺激人物の自己紹介と参加者の性別とは異なる性別の性役割を期待し評価するコメントを組み合わせた。詳細はTable 4のとおりであった。

Table 4 各刺激動画の構成と具体的な内容

刺激動画の種類	刺激人物の性別	刺激人物の自己紹介	実験参加者の性別	実験参加者に対するコメント
伝統的 性役割 刺激	女性	文学部。 編み物が好きで刺繍とかもする、 ウインドウショッピングも好き。 お弁当を作ってきたり、お菓子を作ったりしているからか、女子力高いとか、手先が器用とか言われる。 人と何かしたりするときは、サポートにまるところがあるので、しっかりした、引っ張っていつくれる男性だといいかもしれない。	男性	積極的で行動力がありそうな人。 引っ張っていつくれるところがいい。 決断力がありそうなので、一緒に作業するとき、はかどりそう。 頼りになりそうだから、ミスとかしてもカバーしてくれそう。
	男性	工学部。 車が好きでミッションで免許を取りたい、プラモデルとか工作も好き。 武道系の部活をやっているからか、強そうとか頼りになると言われる。 割と自分の意見を主張したり、テキパキしていたりするところがあるので、温和なやさしい女性だといいかもしれない。	女性	明るくて優しい人。 協力的なところがいい。 人の気持ちを察してくれるような感じがあるので、一緒に作業しやすそう。 相手の立場にたって考えてくれそうだから、ミスとかしても受け入れてくれそう。
非伝統的 性役割 刺激	女性	理学部。 車が好きでミッションで免許を取りたい、プラモデルとか工作も好き。 武道系の部活をやっているからか、強そうとか頼りになると言われる。 割と自分の意見を主張したり、テキパキしていたりするところがあるので、温和なやさしい男性だといいかもしれない。	男性	明るくて優しい人。 協力的なところがいい。 人の気持ちを察してくれるような感じがあるので、一緒に作業しやすそう。 相手の立場にたって考えてくれそうだから、ミスとかしても受け入れてくれそう。
	男性	文学部。 編み物が好きで刺繍とかもする、 ウインドウショッピングも好き。 お弁当を作ってきたり、お菓子を作ったりしているからか、女子力高いとか、手先が器用とか言われる。 人と何かしたりするときは、サポートにまるところがあるので、しっかりした、引っ張っていつくれる女性だといいかもしれない。	女性	積極的で行動力がありそうな人。 引っ張っていつくれるところがいい。 決断力がありそうなので、一緒に作業するとき、はかどりそう。 頼りになりそうだから、ミスとかしてもカバーしてくれそう。

## 実験手続き

実験は(a)事前調査, (b)実験1日目, (c)実験2日目の3つのセッションから成り立ち, 実験参加者は自らの性別と伝統的性役割観の高低, 刺激動画の種類(伝統的性役割刺激, 非伝統的性役割刺激)を組み合わせた8つの条件群に割り振られた。実験参加者には, 刺激以外で性役割を意識することにより, 刺激コメントの効果へ影響しないようカバーストーリーが説明された。

**(a)事前調査** まず事前のパフォーマンス(数独問題, 漢字・四字熟語・ことわざの書き出し問題, IQテストの計3種類15問)を測定した。パフォーマンス課題は, (1)数独パズル(<http://www.free-sudoku-puzzle.com/>)初級数独問題(6×6)のNo.1からNo.6までの数独問題を6問, (2)漢字・四字熟語・ことわざの書き出し問題を4問, (3)2015年IQテスト-A Real Me ([arealme.com/iq-2015/ja/?ag](http://arealme.com/iq-2015/ja/?ag))などを参考にしたIQテストを5問, 計3種類15問の問題を, 順序をランダムにして, 制限時間12分で実施した。数独問題は, 男性が女性よりも優れているというステレオタイプが存在する数的処理能力や論理的思考力を測定し, 漢字・四字熟語・ことわざの書き出し問題は, 女性が男性よりも優れているというステレオタイプが存在する言語処理能力や記憶力を測定するために用いた。IQテストについては, ダミーとして用いた。その後, 実験参加者の性役割特性についての事前の自己呈示, 伝統的性役割観が測定された。事前の自己呈示については,

M-H-F scale (伊藤, 1978) の個人の性役割意識を尋ねる教示文を用いて 30 項目を, 7 件法 (0 ; 全くあてはまらない~6 ; 非常に当てはまる) で測定した。

(b)実験 1 回目 カバーストーリーとして実験参加者自身の自己紹介を撮影した。

(c)実験 2 回目 刺激動画を視聴後, 性役割に関する特性についての事後の自己呈示を測定した。事後の測定では, M-H-F scale(伊藤, 1978)30 項目について「この尺度は, ペアの相手に対して自分自身をどのような人間に見てもらいたいと考えているか, そのイメージを尋ねるものです。次のような形容詞はそのイメージにどの程度あてはまりますか」という教示に 7 件法で回答を求めた。その後, 事後のパフォーマンスを測定するため, 事前パフォーマンス測定と同様に, (1) 数独パズル(<http://www.free-sudoku-puzzle.com/>) 初級数独問題(6×6)の No.7 から No.12 までの数独問題を 6 問, (2) 漢字・四字熟語・ことわざの書き出し問題を 4 問, (3) 国語や数学の 3 択問題を 4 問, 計 3 種類 14 問の問題を, 順序をランダムにして, 制限時間 12 分で実施した。

**カバーストーリー** 実験参加者には, 他者との関係性構築が協同作業へ及ぼす影響に関する研究のため, 実験では実験者が事前調査の結果に基づきマッチングした相手と, 動画を通して交流(動画撮影と動画視聴)をしてもらい, 実験最終日(3 回目)に顔合わせし協同作業に取り組んでもらうことが説明された。実験 1 回目では, 自己紹介や協同作業に関する質問に回答し, その

様子を撮影されること、マッチング相手は後日、自己紹介と実験参加者の自己紹介動画を視聴しながらのコメントを撮影されることが説明された。実験 2 回目は、マッチング相手の自己紹介と自らが映る動画にコメントされている内容の刺激動画を視聴しながら、マッチング相手に対してコメントし、その様子を撮影されること、その後、質問紙に回答することが説明された。さらに、実際には実施されない実験 3 回目では、マッチング相手と顔合わせを行い、得意不得意についての交流後、2 人で協同作業に取り組むと説明された。

**倫理的配慮** 実験参加者には、刺激以外で性役割を意識することにより、刺激コメントの効果へ影響しないようカバーストーリーに沿った実験内容の説明を行った。本実験は倫理審査を受けており、参加の意思確認や動画の撮影許可等に関する承諾書に署名をもらうなどの倫理的配慮も行った。実験は実験参加者の都合に合わせて約 2 週間(平均 13 日)の間隔をはさみ個別に 2 回実施された。なお、事前に実験参加者には、カバーストーリー上、実験は 3 回目までであることを伝えた。実験終了後は、デブリーフィングを行った。

## 結 果 と 考 察

### 信頼性の検討

性役割観を測定するために用いた性差観スケール 16 項目、性役割特性の自己呈示を測定

するために用いた M-H-F scale の Masculinity10 項目, Humanity10 項目, Femininity10 項目それぞれの内的一貫性を検討した。性役割観得点の  $\alpha$  係数は.83, M 得点の  $\alpha$  係数は.87, H 得点の  $\alpha$  係数は.73, F 得点の  $\alpha$  係数は.74 であり, 信頼性が確認された。

#### 漢字・四字熟語・ことわざ書き出し問題および数独問題の得点化

漢字・四字熟語・ことわざ書き出し問題の例として, 「き」偏の漢字をできるだけ多くあげよといった出題形式を用いたため, 得点化する際は書き出した漢字や四字熟語, ことわざの正答数を事前事後それぞれの得点として扱った。したがって, 回答した漢字等が多く, 且つ正答であるほど漢字得点が高くなる。数独得点は事前事後それぞれ, マスに埋めた正答/全体の解答箇所数  $\times 10$  の式により満点を 10 点として算出した。

#### 群分けの妥当性検討

実験協力者は, 性別および刺激動画の種類, 伝統的性役割観 HL の 3 要因の組み合わせによって 8 群に分けられた。群分けに偏りが無いことを確認するため, 性役割観得点を従属変数として性別  $\times$  伝統的性役割観 HL  $\times$  刺激動画の種類 (2) の 3 要因分散分析を行った。その結果, 伝統的性役割観 HL の主効果 ( $F(1, 45)=81.34, p<.001, \eta^2=.62$ ) のみが有意であり, 均等に群分けされていることが確認された。

## 事前調査における3つの要因の効果

事前調査で測定した各変数における各群の平均とSDをTable 5に示す。刺激コメントによる影響を検討するにあたり、性役割特性の自己呈示得点、数独得点、漢字得点に事前の段階で群間差がないか確認した<sup>7</sup>。事前の各得点について、性別×伝統的性役割観 HL×刺激動画の種類×3 要因分散分析を行った結果、F得点において刺激動画の種類で有意な主効果( $F(1, 45)=6.18, p<.05, \eta^2=.11$ )がみられ、非伝統的性役割刺激群の方が伝統的性役割刺激群に比べて、F得点が有意に高いことがわかった。

Table 5 事前調査における各得点の平均とSD

			性役割観	M 得点	H 得点	F 得点	数独	漢字
女性	性役割観 H	伝統的刺激 (n=10)	2.48 (0.34)	2.74 (1.07)	3.19 (1.11)	2.39 (0.71)	6.20 (2.86)	14.00 (5.42)
		非伝統的刺激 (n=11)	2.31 (0.33)	3.22 (0.82)	3.48 (0.42)	2.56 (0.36)	6.18 (3.34)	13.90 (4.81)
	性役割観 L	伝統的刺激 (n=7)	1.63 (0.20)	3.31 (1.48)	3.54 (0.96)	2.23 (1.00)	6.00 (2.77)	14.60 (3.95)
		非伝統的刺激 (n=5)	1.52 (0.23)	3.44 (0.70)	3.70 (0.33)	2.84 (0.60)	5.20 (2.05)	14.80 (4.76)
男性	性役割観 H	伝統的刺激 (n=5)	2.22 (0.22)	2.96 (0.97)	3.10 (0.83)	2.42 (0.92)	2.40 (1.52)	11.60 (4.93)
		非伝統的刺激 (n=4)	2.40 (0.24)	3.50 (0.85)	3.75 (0.70)	3.20 (0.43)	6.00 (2.00)	12.00 (4.97)
	性役割観 L	伝統的刺激 (n=6)	1.65 (0.29)	3.75 (0.83)	3.80 (0.73)	2.27 (0.74)	5.33 (2.79)	19.20 (13.42)
		非伝統的刺激 (n=5)	1.68 (0.22)	3.86 (0.21)	3.78 (0.57)	2.76 (0.83)	4.20 (2.28)	15.00 (3.61)

注) ( )内はSDを示している。

<sup>7</sup> サンプルサイズの少ない群が生じたため、事前事後を含めた4 要因分散分析による検討は困難であると判断し、事前の群間差を確認した。

本研究では、M-H-F scale をそのまま用いた M, H, F 得点を事前得点、教示のみを変更し同一の尺度項目を用いた M, H, F 呈示得点を事後得点とし、その差得点を分析することで、Masculinity, Humanity, Femininity の 3 観点から、言葉かけを受けた後の自己呈示の変化を検討することとしていた。事前調査の段階で群間に差がみられたことから、差得点を基に刺激動画による影響を検討する際、事前の群間差の影響にも留意しておく必要があるだろう。

以後の分析では自己呈示、パフォーマンスについて、事後得点から事前得点を引いた自己呈示量、得点増加程度(数独、漢字得点増加量)を用い、刺激による増減に着目した。

#### 自己呈示やパフォーマンスへの影響

M, H, F 呈示量および数独、漢字得点増加量の各群の平均と SD を Table 6 に示した。各得点について、性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL の 3 要因分散分析を行った結果、M 呈示量で、伝統的性役割観 HL の主効果が有意であった( $F(1, 45)=6.79, p<.05, \eta^2=.12$ )。伝統的性役割観 H 群は L 群に比べて M 呈示量が高く、刺激動画を見て、男性役割特性を高く呈示していたことが明らかになった。しかし、他の 2 特性およびパフォーマンスに関しては、群間に有意な差はみられなかった。

Table 6 各自己呈示量および各パフォーマンス増加量における各群の平均とSD

			M 呈示量	H 呈示量	F 呈示量	数独増加量	漢字増加量
女性	性役割観 H	伝統的刺激	0.55	0.54	0.04	2.00	-2.80
		(n=10)	(1.00)	(1.08)	(0.58)	(1.83)	(4.08)
	性役割観 L	伝統的刺激	0.10	0.16	-0.13	1.43	-3.70
		(n=7)	(1.10)	(0.81)	(0.91)	(2.51)	(4.57)
男性	性役割観 H	伝統的刺激	0.74	0.58	-0.06	2.00	-3.00
		(n=5)	(0.58)	(0.63)	(0.55)	(2.74)	(5.79)
	性役割観 L	伝統的刺激	0.25	0.50	-0.30	2.67	-5.80
		(n=6)	(0.29)	(0.48)	(1.48)	(2.25)	(7.65)
	性役割観 H	非伝統的刺激	0.40	0.38	0.08	1.75	-1.50
		(n=4)	(0.68)	(0.56)	(0.40)	(0.96)	(5.26)
性役割観 L	非伝統的刺激	0.14	0.36	0.08	2.60	-5.20	
	(n=5)	(0.40)	(0.45)	(0.65)	(1.52)	(6.06)	

注) ( )内はSDを示している。

男性役割特性の呈示量における結果から、予想(4)「伝統的性役割を期待された場合、伝統的性役割観の高さに関わらず期待に沿った呈示を行うが、非伝統的性役割を期待された場合、伝統的性役割観が高い人は自らの性別に一致する伝統的性役割特性を呈示する」について、男性のみ支持された。一方で、女性については、女性役割特性の呈示量において有意な結果は得られなかった。男性役割特性の呈示量における結果から、研究IIで得られた示唆が支持されたといえる。女性はこれまで男性役割とされてきた特性を積極的に女性役割に取り入れて、社会的により望ましい女性役割を作り上げている(後藤・廣岡, 2003)と指摘されており、研究IVにおいても伝統的性役割観の高い女性が、男性役割特性を新た

な女性役割特性として取り込み、主体的かつ積極的に男性役割特性の呈示を行っていた可能性が示唆された。

予想(5)「期待された性役割特性に対するネガティブなステレオタイプに従って、該当するパフォーマンス課題の得点は低下する」に反して、数独増加量と漢字増加量では、群間に有意な差はみられなかった。しかしながら、漢字増加量では、どの群の平均点においてもマイナスの得点となっており、刺激動画を視聴した後で漢字の得点が下がっていることが確認された( $t(52)=5.45, p<.001, d=.75$ )。暗黙の性役割期待を内包する言葉かけの影響を検討した本研究においても、類似性のある好意的性差別の影響と同様に、パフォーマンスの低下が起こることが示されたといえるだろう。Dardenne & Dumont (2007)では、好意的性差別を受けたことによるワーキングメモリへの干渉などが原因となり、パフォーマンスの低下が生じるとの考察がなされている。漢字等の書き出し問題の解答には、記憶の想起が大きく関わっているため、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによる干渉を受けやすい能力を必要とする課題であったと推察される。

他方で、数独増加量においては、どの群の平均点もプラスの得点となっており、パフォーマンスの低下はみられなかった。これは、数独という問題の性質に起因するものと考えられる。数独には、様々な解法ロジックが存在しており、土出・真貝(2011)によれば、数字の入るマス

絞り込む方法(CRBE 法)と、マスに入る可能性のある数字の候補を絞り込む方法の、大きく分けて 2 つの解法ロジックがある。これらのロジックを理解し、解法スキルを身に付けていれば、数独問題を素早く解くことが可能となるといえるだろう。そのため、数独は解いた経験が多いほど得点上がる可能性が高く、解法スキルを身に付けているかどうかにより得点が左右される課題である。

本研究では、事前テストと事後テストの間に 1 週間以上の期間を設けており、事前テストに解答した実験参加者がその期間に自主的に数独の解き方を調べた可能性も考えられる。これらを踏まえると、数独問題においてパフォーマンスの低下が確認されなかったのは、Dardenne & Dumont(2007)が考察しているようなワーキングメモリへの干渉が、直接的に問題の解法に関係していなかったためだと推察される。

本研究では、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによってパフォーマンスの低下が起こる可能性が示され、課題の性質や必要とされる能力によってその影響は異なることが示唆された。

しかし、群間に差はみられなかったため、受け手の性別や性役割観、期待の種類による違いは確認されていない。今後は、サンプルサイズを増やし、課題の性質など複数の観点からパフォーマンスへの影響を検討していく必要があるだろう。

## 第3章 総合考察

### 第1節 結果のまとめ

本研究では、同年代の異性からの期待や評価が大きな影響を及ぼす青年期に着目し、送り手の性役割期待を内包する言葉かけが受け手の自己呈示やパフォーマンスに及ぼす影響について、発達の観点を含めて検討した。

研究 I により、青年期前期にある中学生が性役割期待を暗黙裡に受けた場合、女子中学生では、非伝統的な性役割期待を受けた際にその期待に沿った特性を演じやすいことが明らかにされた。対して、男子中学生では期待に沿った伝統的な性役割特性の呈示がみられなかった。

研究 I の結果や、性役割認知の発達には被験者の性による差があり、男子では年齢による変動が顕著であること(柏木, 1972)を踏まえると、特に男子中学生がどのように性役割特性を取得し、自らの性役割として取り込んでいくのか、発達段階に着目した検討が必要であることが考えられた。研究 II により、主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の女子大学生においても、送り手の性役割期待に沿うような性役割特性の呈示を行うことが明らかにされた。

一方、男子大学生については伝統的な男性役割に縛られ、女性役割特性を受容していないことが示唆された。これは、渡邊(2017)や Moss-Racusin, Phelan, & Rudman(2010)、後藤・廣岡(2003)などの研究で述べられた、逸脱に対する社会的罰や女性役割への低い評価が関連していると考えられた。また、先行研究において、青年期後期では、女性の女性役割行動が、実際

相手である男性の男性役割行動の遂行度を高めることが指摘されている(赤澤, 2006)。このことから, 異性からの性役割期待を内包した言葉かけによって, 青年期後期の男性における伝統的な男性役割特性の呈示は, より高まった可能性が考えられた。また, 人間性の呈示が青年の適応に重要な役割を果たす可能性が示唆された。研究ⅠとⅡで得られた青年期前期の中学生男女と青年期後期の大学生男女のデータを用いて, 発達段階による差がみられるのかを検討した研究Ⅲでは, 暗黙の性役割期待が性役割特性の自己呈示に及ぼす影響について, 発達段階による違いが男性において顕著に示された。男性が青年期前期に受けた男性役割期待は, 受動的な男性役割の取得を促し, のちに自己呈示を通じた伝統的な性役割の強化, 再生産へとつながっている可能性が示唆された。一方で, 女性については, 中学生の段階で性役割取得から性役割学習への移行が済んでおり, 社会的に期待される女性役割には当てはまらない男性役割特性についても, 葛藤なく呈示を行うことが明らかにされた。大学生を対象とし, 実験的に暗黙の性役割期待が及ぼす影響について検討した研究Ⅳでは, 伝統的性役割観の高い女性が, 男性役割特性を新たな女性役割特性として取り込み, 主体的かつ積極的に男性役割特性の呈示を行っていた可能性が示唆された。

## 第3章 総合考察

### 第2節 本研究の意義

本研究の意義としては、以下の点があげられる。まず、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけであっても、その期待に沿った呈示を行うことが示された。性役割期待に関する多くの研究では、実験操作として刺激人物の性役割観や実験参加者の性別を強調した刺激の提示が使われ（例えば、Riemer, Chaudoir, & Earnshaw, 2014; 森永・坂田ら, 2017）、その影響について検討されてきた。本研究では、これらの先行研究のように明示的な性役割期待でなくとも、受け手は暗黙の性役割期待に沿った呈示を行うことを明らかにした。特に、女性は発達段階に関わらず、送り手の期待に沿った呈示を行っていた。このことから、女性は、周囲による暗黙の期待に沿って自らの性役割を学習しやすいと考えられるため、暗黙裡であっても伝統的な女性役割を期待されることが多ければ、自己呈示を通して女性役割が再生産されうるだろう。しかし、男性役割についても積極的に受容していることから、周囲からの影響を受けやすい反面、柔軟に性役割を学習し呈示することができるといえる。対して、男性は、発達段階による差が顕著であり、青年期後期の大学生において男性役割にしばられ、女性役割を受容しにくいことが示された。従来の関連研究ではあまり着目されてこなかった男性についても対象として検討していくことの重要性が示されたといえる。また、本研究では、自己呈示について伝統的な性役割特性の 3 側面を取りあげることによって、女性が特に男性役割特性を用いて期待に対応した呈示を行っていること

を明らかにした。他者の性役割期待に沿う自己呈示が行われることを見いだした松本(2002)の研究では、女性を対象として、女性役割観にもとづいた自己呈示を尋ねていたため、男性役割特性の自己呈示については検討されていなかった。本研究の結果は、先行研究のように性別に対応する役割の呈示にのみ着目するのではなく、多面的に性役割に関する呈示を検討していく必要性を示すものである。性役割特性の呈示を組み合わせることで印象を調整しているのかなどの検討を可能にし、新たな視点から性役割期待が自己呈示へ及ぼす影響を明らかにすることができたといえよう。

## 第3章 総合考察

### 第3節 本研究の課題と今後の展望

本研究の課題としては、以下の点が挙げられる。まず、研究Ⅰ、研究Ⅱで質問紙調査を行うにあたり、場面想定ストーリーとして刺激人物の紹介を挿入したが、刺激人物の紹介の情報をどの程度自己呈示の参考にしたのか、最後のコマの刺激コメントを男性/女性役割への期待だと捉えたかなど、調査協力者の認知について操作チェックを行わなかった。理由として、調査協力者の認知を誘導せずに、上記の2点を確認することは困難であることが挙げられる。しかし、これにより実験手続きにおいて以下の課題を抱えざるをえなかった。すなわち、調査協力者に向けられた暗黙の性役割期待以外の影響を排除できないという課題、調査協力者が刺激コメントを性役割期待として受け取ったのか単なる期待として受け取ったのか判別できないという課題の2点である。今後は受け手の認知面についても着目しつつ、実験方法を工夫した検討が必要である。

次に、研究Ⅳでは、実験的に検討することを試みたが、実験参加者の人数において群に偏りがみられた。そのため、十分に検討できたとは言い難い。今後は、各性役割特性とパフォーマンス、伝統的性役割観の間には関連がみられるのかなどを検討することも視野に入れ、実験手続きの工夫およびサンプルサイズを増やすことが必要である。また、暗黙の性役割期待と類似性のある好意的性差別の研究において、受け手に影響を及ぼすプロセスとして、ネガティブ感情が意欲を低めている(森永・坂田ら、2017)ことなどが確認されている。したがって、今後、性役割期待を

内包する言葉かけの影響プロセスを検討する際には、ネガティブ感情としての不安感についても

考慮して検討していく必要がある。

## 引用文献

- 赤澤淳子. (2006). 青年期後期における恋愛行動の規定因について: 関係進展度, 恋愛意識, 性別役割の自己認知が恋愛行動の遂行度に及ぼす影響. 仁愛大学研究紀要, **5**, 17-31.
- 青木直子 (2009). 小学校1年生のほめられることによる感情反応: 教師と一对一の場合とクラスメイトがいる場合の比較. 発達心理学研究, **20**, 155-164.
- 東 清和. (1990). 心理的両性具有I: BSRI による心理的両性具有の測定. 早稲田大学教育学部学術研究: 教育・社会教育・教育心理・体育学編, **39**, 25-36.
- 東 清和. (1991). 心理的両性具有II: BSRI 日本語版の検討. 早稲田大学教育学部学術研究: 教育・社会教育・教育心理・体育学編, **40**, 61-71.
- Cialdini, R. B., Wosinska, W., Dabul, A. J., Whetstone-Dion, R., & Heszen, I. (1998). When social role salience leads to social role rejection: Modest self-presentation among women and men in two cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 473-481.
- Dardenne, B., & Dumont, M. (2007). Insidious dangers of benevolent sexism: Consequences for women's performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **93**, 764-779.

土出智也・真貝寿明 (2011). 数独パズルの難易度判定—解法ロジックを用いた数値化の提案. 大阪工業大学紀要, 理工篇, **56**, 1-18.

土肥伊都子.(1995). 性役割分担志向性・実行度および愛情・好意度に及ぼす性別とジェンダー・パーソナリティの影響. 関西学院大学社会学部紀要, **73**, 97-107.

Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 491-512.

後藤淳子・廣岡秀一.(2003). 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化. 三重大学教育学部研究紀要, **54**, 145-158.

伊藤裕子.(1978). 性役割の評価に関する研究. 教育心理学研究, **26**, 1-11.

伊藤裕子.(1997). 高校生における性差観の形成環境と性役割選択: 性差観スケール(SGC)作成の試み. 教育心理学研究, **45**, 396-404.

伊藤裕子・秋津慶子.(1983). 青年期における性役割観および性役割期待の認知. 教育心理学研究, **31**, 146-151.

柏木恵子.(1967). 青年期における性役割の認知. 教育心理学研究, **15**, 193-202.

柏木恵子.(1972). 青年期における性役割の認知II. 教育心理学研究, **20**, 48-58.

高坂康雅・戸田弘二 (2006). 青年期における心理的自立 (IV): 心理的自立の発達的变化.

北海道教育大学紀要 (教育科学編), **57**, 135-142.

松本芳之. (2002). 役割期待が自己呈示行動に及ぼす影響: 性役割期待と成功回避. 早稲田

大学大学院文学研究科紀要: 第1分冊 哲学東洋哲学心理学社会学教育学, **48**, 39-52.

光元麻世・岡本祐子. (2010). 青年期における心理的居場所に関する研究: 心理社会的発達

の視点から. 広島大学心理学研究, **10**, 229-243.

Moss-Racusin, C. A., Phelan, J. E., & Rudman, L. A. (2010). When men break the gender rules:

Status incongruity and backlash against modest men. *Psychology of Men and Masculinity*, **11**,

140-151.

森永康子・坂田桐子・古川善也・福留広大. (2017). 女子中高生の数学に対する意欲とステ

レオタイプ. 教育心理学研究, **65**, 375-387.

Riemer, A., Chaudoir, S., & Earnshaw, V. (2014). What looks like sexism and why? The effect of

comment type and perpetrator type on women's perceptions of sexism. *The journal of general*

*psychology*, **141**, 263-279.

竹内史宗 (1995). 子どもは「叱り」をどのように感じているか. 教育心理学年報, **34**, 143-

149.

多々納道子・若築純子 (2003). 中学生のジェンダー観の形成要因. 島根大学生涯学習教育

研究センター, **2**, 15-27.

渡邊 寛 (2017). 伝統的な男性役割態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検証. 心理学研究,

**88**, 488-498.

## 謝 辞

本学位論文の執筆に際し、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。調査に協力して下さった広島大学附属三原中学校の生徒の皆さま、教諭のみなさま、そして広島大学教育学部の学生の皆さまに心から感謝いたします。

指導教員である井上弥教授には、本研究を進めるにあたり、多大なご指導と温かいご助言をいただきました。研究に行き詰まったとき、悩んだとき、先生の研究室へ足を運び、話し込む毎日でしたが、井上先生はいつも温かく迎えてくださり、私の話を聞いてくださいました。働きながら執筆できればと相談した際にも、親身に進路相談に乗っていただき、公私問わず支えてくださいました。心より感謝いたします。

副指導教員である児玉真樹子教授には、実験方法や分析手法など、様々なご助言をいただきました。同じく副指導教員である山内規嗣教授、伊藤圭子教授におかれましても、ご多忙の中、他分野の視点から親身にご指導およびご助言いただきました。先生方に厚くお礼申し上げます。また、貴重な講義の中での質問紙収集の依頼にも関わらず快くお受けくださった米沢崇准教授、貴重なご意見をいただきました藤木大介准教授をはじめとする、学習開発学講座の先生方には、大変お世話になりました。ここに感謝の意を表します。加

えて、学習開発学講座の事務として、研究に集中して取り組むことができるよう陰ながら

支援して下さった門前文恵さんに、深く感謝いたします。

私の院生活が楽しく充実したものとなりましたのも、ひとえに先生方と、学習開発学講座に所属する先輩方や同期、そして後輩の皆様のおかげです。ありがとうございました。

そして最後に、博士課程後期まで進学し研究に取り組む私を、陰ながら応援し、支援して

くれた両親、家族には大変感謝しています。本当にありがとうございました。

2020年1月4日 吉岡 真梨子